

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

知のナタをふるってウランバートルを造った男：
元産業大臣パーワンギーン・ダムディンは語る

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001895 |

知のナタをふるってウランバートルを造った男 元産業大臣パーワンギーン・ダムディンは語る

解説

- 1 ウランバートルまでの道のり
- 2 初めてのウランバートル
- 3 人民革命25周年記念ナーダム
- 4 専門学校の予備クラス入学
- 5 党中央委員会に就職
- 6 ソ連留学をめざす
- 7 モスクワでの生活
- 8 産業大臣に就任
- 9 戦前の産業コンビナート建設
- 10 戦後の産業発展
- 11 エネルギー部門と重工業の発展
- 12 繊維工業の発展
- 13 食品工業の発展
- 14 私有化の失策
- 15 産業復興のための施策
- 16 カシミヤ工場「ゴビ」の建設

解説

ダムディン氏は1929年まだ人民革命後まもないころオブス県ウンドゥルハンガイ郡に生まれた。17歳のとき革命25周年記念の祭りを見るためにウランバートルに上京したことがきっかけとなり、経理・経営を学ぶこととなる。1950年専門学校を卒業すると同時に、人民革命党の党中央委員会の経理を担当した。1952年から5年間モスクワに留学して経済学をおさめ、1958年に帰国してからは国家予算をつかさどる計画委員会に勤める。そして1960年に若干30歳で産業大臣に就任し、以来ほぼ30年間大臣の地位を追われることなく、モンゴル国の基幹産業を整備するという責務をまっとうした。

首都ウランバートルに発電所を建設してインフラを整備し、つぎつぎと工場をたててゆく。その歴史はまさしく首都の建設史にほかならない。と同時に、それは遊牧民が作り出す畜産物を工業製品に転換させる産業史でもあった。いわば、都市と草原はこうした工場建設によって結びついたのである。これらの工場建設を指揮していたダムディン氏は、モンゴル国の産業史を体現する人物といっても過言ではあるまい。

インタビューは2001年8月ウランバートル市の南郊にあるホテルの一角でおこなわれた。電話で指定した通りの時刻に彼は首にスカーフを巻いて姿を現した。彼のこのファッションにはわけがある。首の具合が悪く、それはかつて外遊の際に飛行機墜落事故に遭遇し、ただ1人の生存者として生き残ったときの後遺症だ、と言う。その類まれな才能は、同じく類まれな強運によって今日まで維持されているのだろう。

インタビューは4時間という限られた時間を一寸も無駄にすることなく進行した。剛毅さあふれるその口ぶりは、かつて「ナタ男」と異名をとった人らしく、厳しさを十分に感じさせた。そしてなおかつ皮肉はたっぷり、ユーモアもあふれ、私たちを四

六時中笑わせてくれた。4時間をほんのまばたきの一瞬に変えてしまう魔法のように、私たちが魅了する話が繰り広げられた。

私たち聞き手は、時おり合いの手を入れてごく簡単な質問をはさんだりもしたが、おおむね話の筋は本人の意図によって決められていたと言ってよいだろう。時間軸は前後にゆらぐことなく、幼少期、青年期、留学時代、大臣時代と進んでゆく。一面、それは自分自身の出世の自慢話でもあるはずなのに、聞いていて決して嫌みはなく、驕りもない。彼自身のなかに、自己が社会によって活かされていたという感覚が根強いからにちがいない。

けれど、かつては多くの人びとが個人のしあわせと社会のしあわせを重ね合わせて1本の道にして生きることができたのだろう。時を取り戻すことは誰にもできないが、戻らぬ時の真実を知ることはできる。

D：P.ダムディン

K：小長谷有紀

L：I.ルハグワスレン

1 ウランバートルまでの道のり

D：今年、モンゴルの新聞に出た「モンゴルの将来についての私見」という君の書いた記事を読んだ。私はこの記事を春に読んだのだがね。この記事を読んで初めて君のことを知るようになった。今回、君がぜひ私と会いたいと言っているとI.ルハグワスレンから聞いて、もう1度読んでみた。実におもしろい記事だ。こういうふう書いているのは実に良いことだ。私は木村理子の書いた「痩せ衰えた脳」という記事も読んだ。あの記事もたいへんよく書けていたよ。なかには非常に嫌悪感をもった連中もいたがね。モンゴル人を攻撃して馬鹿にしていると言うのだよ。私は個人的には賛同していた。もっともだよ。私たちの欠点を図星で言い当てていたよ。真実は真実のままに書くべきだ。彼女は君の弟子と聞いたが、そうかね？

K：いいえ。彼女はちょっときつい書き方をしたようですね。

D：私はきつい人間なのだ。実に頑固な気質の人間だよ。君が理子と出会うことがあったら、P.ダムディンさんと会った、君の書いたものを読んだ、とても感謝していた、と言ってくれ。彼女を腹立たせるようなことを新聞に書いている者もいる。私たちを馬鹿にしたとか、傲慢だとかね。しかし、そうではない。皆がみな、そう言っているわけではない。多くのモンゴル人が私と同じように賛同しているのではないか、と思うよ。

K：今回、モンゴルの新時代の歴史というテーマであなたとお話したいと思いまし

た。ウランバートルの歴史はいろいろなものを建設してきた歴史ですよ。工場を建設したあなたのお仕事について少々お話しいただけますでしょうか。

D：ここに I. ルハグワスレンの書いた質問のリストがある。たくさんの質問があるなあ。

K：1つずつ質問に答えるというわけではないのです。ご自身でその質問を展開して、あなたの伝記のように語ってくださればいいのです。

D：経歴から始めようか？時間をひとつ言ってくれるか？詳しく話すとなると、何時間話してもいいが、手短にというなら、数分におさめることだってできる。

K：今日の6時まで話してもよろしいですか？

D：よいとも、よいとも。

K：それでは、あなたは何年に、どこでお生まれになったのですか？自分の幼年時代について、父母について、学校時代のことについて、ウランバートルに何年に上京したか、そしてロシアに何年に留学したか、帰国してどこでどんな仕事をしていたのかについて、お話しいただけますか？

D：私は君に生まれ故郷について紹介することにしよう。オブス県にウンドゥルハンガイという郡がある。ウランバートルからおよそ1000キロメートルのところにある。ここは、本当に遠いところなのだよ。昔、人びとはボクド山にお参りしようとラクダで隊列を組んで行ったという。往路2ヶ月、復路2ヶ月で移動していた。私たちの時代には、少しは変わったがね。車が出ていたからね。我が県中心であるオラーンゴムから郵便配達車が往来していたのだよ。ウンドゥルハンガイからオラーンゴムに入って、そこから郵便配達車に便乗することになっているのだ。しかし、この経路は時間と金がかかるのだ。私の父や母はウランバートル入りするときに、ザブハン県の中心であるウリヤスタイまでラクダで移動した。私は父と母のうしろについて初めてウランバートルに来た。

L：就学のためにウランバートルに行ったのですか？

D：ちがう。私は17歳までどんな学校にだって行かなかった。牧民だった。私の父は多くもなく、少なくもない、ほどほどの家畜をもっていた。我が家は100頭ほどのヒツジ、10頭ほどのウシ、20余頭のウマ、5、6頭の運搬用のラクダのいる中程度の家だった。私の父は鍛冶屋だった。非常に有名な。銀、鉄、銅、真鍮でものを作っていた。いつも服のボタンや、イヤリング、指輪、錠、鞍の銀飾りを作っていた。そんなわけで、家畜は多くないが、私たちの生活は悪くはなかった。

K：兄弟は多いのですか？

D：3人兄弟だ。兄と、私と、妹が1人。兄は兵役に行っていた。当時は、兵役期間が3年から4年だった。このモンゴル人には、父母が兵役についた子どもを訪問するというなかなかいい習慣があるのだ。兄は兵役に行って、昇進して将校になってね、

防衛省に就職していた。

父と母は、兵役についている息子に面会すること、首都見物、人民革命25周年記念の見物のために私と妹の2人を連れてウランバートルにやって来た。これは1946年のことだ。ちょうど人民革命25周年記念がおこなわれようとしていたころだ。私たちはいなかから4月ごろに出たのだろうな。ザブハンまでラクダで移動した。そこから車に乗ってね。車に乗るといえるのは、それはたいへんだった。その当時は、車が本当に少なかったからね。1週間に1度、郵便配達車が出るときだけ出るのが。ウランバートルに行く連中は多かった。ザブハン県の中心で、かなり時間を費やしてから車に乗ったよ。

K：どんな車が郵便配達車だったのですか？

D：“ZIS-5”というソ連製の車が走っていたよ。今では全くないがね。博物館にあるかもしれないがね。私たちはいなかから、父と母と、それに妹と私の2人が一緒に出てきた。ついでに、父は鍛冶屋で有名な人だったから、父がウランバートルに行くというので、父の知り合いの老人が1人、これまた自分の息子に会うと言って一緒に出発した。このほかにも、父の知り合いのザヤートという漢人が一緒についてきた。私のいなかには2人ほど漢人がいた。父は鍛冶屋だったから、互いに協同したり、道具などを交換したりして、一緒に仕事をするようになって、父とは結構仲が良かったのだよ。父がウランバートルへ行くと聞いて、このホジャー（漢人）が、「私を連れて行けよ。ウランバートルを見物させてくれよ」と言って頼んだのだな。こうして、私たち4人に、老人1人と、そのホジャーが付け加わった。たった1人の人間を単に乗せるのなら簡単だよ。だが大勢となると、たいへんだ。私たちはザブハンから1台の車に乗り込んだ。私は、それを今でもよく覚えているよ。

それから、私たちはツァガン・オロムトという場所を経由した。ツァガン・オロムトという場所を知っているかい？ オブス、ホブド、ゴビアルタイ、ザブハンといった県の間にある交通の要所だ。ここでは車の数も少しは増えるのだ。私たちは1台の車を頼んで乗り込んだ。私たちは6、7人だった。私たちのいなかから全部で8人だった。8人を1台の車に乗せるなんて、それはたいへんだったよ。そんなわけで、とても時間がかかったね。車に乗り込んでから、10泊してウランバートルに着いたと思う。えらく悪い車でね。それにまた、そのころの運転手といたら、そりゃあ気ままだった。規則とか規律とか、あったものじゃない。そのころ、車を運転した人間というのはね、お偉いのだよ。運転手は好きな場所で、県の中心とかにやって来ると、お客を下ろしてしまうのだ。当人は、知り合いの家を訪ね歩いて酒を飲んだりして、いなくなってしまう。こういうふうには、ウランバートルへは10泊して到着した。

ウランバートルに入ると、実におもしろかった。私は建物というものを初めて見た。私は17歳だった。兄と面会するはずだったのだが、その住所が分からなかった。私た

ちが乗ってきた車はいなかから来た皆を降ろして置き去りにした。皆三々五々に散って行った。兄弟が迎えにきていれば、その人と一緒にね。当時は、今のように、人を迎えたり、迎えに行かせたりする連絡は何もないのだよ。私たちは降りて、お金を払って、馬車を止めて、その上に荷物を載せて、自分たちはその上に乗って動いた。とってもおかしな風情だったはずだ。今も思い出すよ。第1学校（10年制）の前を移動した。チョイバルサン元帥の公邸の脇だよ。そこで警官が止まれと言った。そのとき警官がいたのだよ。私たちは、大きな荷物を載せた車に7人乗りで移動していたからね。警官は、「こんなふうには走ってはならない、降りろ」と言っているようだった。それで全員降りた。その警官から防衛省の建物がどこにあるかを聞いた。今の農牧業省を知っているかい？ 私たちが来たころには、そこに防衛省の事務所があった。今では入り口に牧民と農民の2つの像があるがね、当時はその代わりに銃をもった2人の兵士の像が立っていたよ。そこについて、父は中に入った。まもなく兄が駆け出て来て、母に頬をよせて、それから私に頬をよせ、妹にも頬をよせた。そのころ、兄には自分の家はなく、単身で下宿していた。ある年老いた婦人のところに住んでいた。それは4枚壁の小さな天幕だ。私たちを連れて行くと10人くらいの人数になってね。そんなふうにして初めてウランバートルに来たのだ。

私がなぜ学校に入らなかったかと言えば、1つ事情があるのだ。学校というのは最初、夏季にだけ授業をしていた。生活を考えると、それはとても合理的なことだった。冬季には学校の授業はなかった。夏は放牧に人の手はかからない。けれど、冬は父か母を手伝う必要がある。私たちの郡に初めて小学校ができたころ、夏だけ授業をやっていた。当時、郡役場は牧民たちの移動に伴って移動していた。郡の中心には郡長の事務所、党委員長の事務所など5、6軒の家があった。学校は天幕2つだ。学校ができたのころ、私は2週間だけ通った。私はどうもわがままな子どもだったらしくてね。私は夏に肉や小麦粉やアメを食べるような子どもだった。乳製品が嫌いでね。どうやら甘やかされた子どもだったらしい。私が学校に入るとき、父は大きな袋に入ったアメを買ってね。10kgもあったと思うのだが、校長先生にそれを渡して「校長。うちの子どもはアメを食べないではいられなくてね。この袋からうちの子どもに1日にアメを2つやってください」と言って帰った。私が校長のところに行くと、私に2つだけくれるのだ。そのアメはいろいろな種類のアメが混ざったものだった。

そのころの学校はモンゴル天幕のなかで授業をして、机とか椅子はない。下に敷くものを1枚、家からもってくる。その敷物を敷いて、モンゴル服を上から被って眠るのだ。朝起きて、そのモンゴル服を敷物に巻きつけて椅子がわりにする。そしてその上に座る。膝の上に本を載せる。そのころ、鉛筆とか紙とかいうものはなかった。木をカンナで削って、その上に油と墨を塗りつけてノートにするのだ。ヒツジの尻尾で油を塗りつけて、その上に墨と馬糞を塗りつける。本当にちゃんとしたすべすべした

ものになるのだよ。文字はその上に竹ペンで書く。竹の先端を尖らせてペンにする。日本にはあるかね？それで書く。書いたものを消してはまたその上に書く。そういったノートだった。ノートは膝の上に置いておきながら勉強する。どんな授業を教えていたのかな？今思うと、文字を教えていたのだろうな。それと算数と。そんな形で2週間勉強したよ。私は父と母が恋しくて、食べるもののことを思うとつらかった。学校の食事といたらね、本当に不衛生でひどいもので、食事が恋しかった。私は放牧をいつもしていた子どもだったからね。ウマを1頭見つけてひと駆けすれば、家はそんなに遠くないような気がしていた。行くぞとってはいたのだが、いざ行くとなると、7、8歳だったから、迷ってしまうのではないかと怖かったのだ。元来、自分の近所はよく知っていたのだがね。

そうこうしているうちに父と兄が2人して訪ねてくれた。そして校長に会った。「おい、調子はどうだ？」と言うのだ。そんなわけだから、私は父を見るなり泣いてしまった。「父と一緒に帰る」と言ってね。「だめだ。お前は学校で勉強するのだ。帰ってはならない」と言う。私は、「いや帰る」と言いはってね。「どうか校長先生のところに行って休学の許可を取ってください」と頼んだ。父は郡では有名人だった。パーワン職人といって、皆が尊敬していた。父は校長のところにもう1度行った。「校長。うちの子どもは家が恋しくて、母親を恋しがっているようでね。数日休みを下さい」と頼んだ。「授業が終わらないのに駄目ですよ。戻ってきたときにはほかの子どもは新しいところを習ってしまっていますから」と校長は説明している。私も「絶対帰るから」と言って、服を引っ張って泣いていた。父は「ちょっと母親に会わせて戻ってきますよ。実は母親も恋しがっているのです」と言った。「校長先生、私は14日帰ってきます」と横から私は自分で校長に言った。

そんなふうに帰宅して、そのまま私は学校をやめた。学校なんていうものはくだらないと思うようになったのだ。それで、私は学校なしで育った。兄のほうは学校へ行った。当時、第2次世界大戦が起っていた。新文字（キリル式モンゴル文字）が教えられ始めていた。旧モンゴル文字（ウイグル式縦文字）は私の母の兄のセレーテルという人が教えてくれた。彼もまた牧民だった。とはいっても、読み書きのできる人だった。彼は私が5、6歳のときに教えてくれたのだ。モンゴル国は、県に、県は郡に、郡はバグ（行政単位）に分けられていた。私たちの県には、当時16郡があり、私たちの郡には11バグあって、私のところは第10バグに属していた。新文字教育のために、まず、バグに文字教室が設立された。そこで新文字で教えていたよ。私はこの教室に出席して、新文字のイロハを習って、その後進級して、郡の学校で勉強した。当時は、バグの長が何かを言えばそれが法律となった。バグ長が子どもを学校に行かせるというので、郡の学校に行って勉強したのだ。こうして私は新文字のイロハを覚えた。兄が夏休みに戻って来た時に、算数を教えてもらった。兄は県の中学校で勉強していた

からね。こんな具合に読み書きを覚えた人間がウランバートルにやってきたわけだ。

17歳だったが、あまり読み書きもできない、そのくせタバコを吸う。私は2種類のキセルをもっていてね、1つは吸い口のついた洒落たもので、それをモンゴル靴の胴のところに入れていた。草原で放牧に出るときは、吸い口のないキセルか、木製の上の部分はずして出かける。母はミシンでものをいつも縫っていたので、私にタバコ入れケースを縫ってくれた。私は、いなかにいるときは、かなりお偉方のなかに入る。父について、ジョンジョーに行くからね。ジョンジョーというのを知っているかい？ ジョンジョーというのはね、ナイル（お祝いの宴会）のことだ。子どもの幼毛を切るお祝いや、新築祝いのことだ。父は郡でかなり尊敬されていた人物だったから、いつもよく呼ばれていたよ。時には父だけでは間に合わずに、父の代行で私も出かけて行った。出かけて行って、そこの子どもの産毛を切ってあげる。遠い親戚や近い親戚、それに知り合いといった違いに応じて、頭に白い筋のはいった白ヒツジなどの家畜をくれる。ハダグ（儀礼用絹布）を捧げながらくれるのだ。父の代わりだから、私を特別待遇してくれる。パーワンさんの息子が来たと言って大事にしてくれる。近くて親しい親戚なら、父が自分で行く。父は大きな家畜、2歳馬、大型家畜をプレゼントしていた。こういうふうには教育のない、かなり粗野な人間が首都を生まれて初めて見ているのだよ。

ザブハンを経由してウリヤスタイにやって来たときに、私は初めて電気というものを見た。1軒の家に着いて、夜になると、丸いガラスをぐるぐる回すのだ。当時はスイッチなどというものはない。直接電球のガラスを回して、つけていたのだよ。そのガラスを回すと、明かりもつくけれど、音も出そうな気がした。その家には丸くて黒いものがあつた。人が話をして、歌もうたっていた。それがラジオだったのだ。私たちの県は遠いから、発展からかなり遅れていたわけだな。ラジオや電気、電話、新聞雑誌などはなかった。ほんのたまに新聞雑誌が入る。私がいなかにいたころは、世界の東側はトローンで、西側はズーンハンガイで終わっているとばかり思っていた。車だって1年にほんの時々通るくらいだ。県知事や県の党委員長の車だ。運搬用の車は本当に少なかった。私たちは草原で轍を追いかけていったよ。何ヶ月前に通ったかは分かったものじゃない。草原を通り抜けた轍というのはね、消えないのだよ。ウマに乗って追いかけていくのだ。場合によっては数日前についた跡かもしれない。

1年に1度、地方宣伝隊というのが巡回することになっていた。芸能活動や宣伝活動、映画や音楽がみんな一緒になっているのだ。ウランバートルからこういう宣伝隊が1年に1度巡回するのだ。私たちはその時に来た映画をすべて見る。コンサートもある。宣伝隊は少人数で行動している。歌う人が2人いて、映画を写す技師が1人という具合だ。彼らは国の進展を謳った掲示版を出していた。展示会というのかなあ。オルグ活動もする。こんなふうには郡で3、4日泊まっていく。彼らは引き続いて移動す

る。春に出発して、秋に戻るという具合だったのだろうな。党や政府がそういう政策を敢えて考え出したのだから、仕方がないがね。そのときに、私は初めてショローティーン・ツェウエーンの演じる映画を見たのだよ。ショローティーン・ツェウエーンの娘は今生きているよ。ショローティーン・ツェウエーンというのはね、モンゴルのほとんど最初の芸術映画だろうと思う。サイレント映画だ。時々文字が出てきて、こうしようとしているとか、ああしようとしているとか、説明が入る。地方でそれは50ムングか、20ムングで興行していたと思う。草原で観るのだよ。スクリーンを屋外で広げるのだ。年寄たちが切符を買っては屋外で座り込む。私たち子どもはそれを観る金もないし、座って見る気もない。なんといっても金がないからね。そんなわけでウマに乗ってスクリーンの裏側に行って、そこに立つのだ。そこからは人の着ている服がいつも反対側から見えるのだよ。地方の子どもというのはね、馬上から見るのだよ。どんな映画が上映されたって全部見るのだ。地方の生活というのはこういうものだった。そしてウランバートルにこういう人間が来たというわけだ。今の農牧業省があるところで降りた。その南側に軍幹部の住宅区域というのがあった。大きな柵があるのだ。その内側にはたくさんの天幕が並んでいた。

2 初めてのウランバートル

K：そのころ、馬車というのは中国人がやっていたのでしょうか？

D：そうだ。中国人もいたし、モンゴル人もいた。たいていは中国人だったろう。そもそも、その当時、ウランバートルには2、3台ほどのバスがあっただろうと思う。私は初めてバスというものにも乗ってみた。だけどたいていは馬車で移動する。馬車にもいろいろある。荷車用の馬車もあれば、乗車用のもあれば、ごく普通の馬車もあれば、とても洒落たものだってある。かなり豊かで能力のある奴はそれに乗って移動していたよ。乗るときには3トゥグルグ、あんまりよくないものだったら、1トゥグルグとか、いろいろだよ。私たちはそんなものには乗らないがね。金もないし。私たち子どもは時々後から乗り込むわけだ。時には力づくで乗り込んでしまう。顔を押しつけあう始末だよ。そうして、馬車から降りて夜になった。兄のところに行って、みんなで泊まった。朝起きてきて、私は初めて2階建ての建物を見た。いやあ、まったく、どれくらい高いものが見えるのだ。こうやって、上を仰いで見るのだ。

それから、地方から来た人はね、兄弟たちに会うのだ。知り合いの同郷の人たちの家を回る。知り合いを回るのだ。その後、市場に行く。市場というものには2つの大きな場所がある。日用品市場と食料品市場があった。昔の百貨店、今は博物館のあるところだが、そこに日用品市場があった。セルベ川はね、西セルベと東セルベと言われていた。西セルベ、つまり今のザナバザル記念美術館の西側にはね、西の市場があ

った。シャル・デルゲールの近くということだ。そのあたりは漢人区域なのだよ。ユスン・ゴダムジ（9つの街路という名の通り）とか、ウルゲン・チュルーニー・タルバイ（広大な自由の広場という名の広場）とか、おかしなものがあつたのだよ。私だってそれをよく知っているわけではない。そこからかなり南に行くと、今のサーカス小屋のあるあたりに食料品市場があつたのだ。私はそのころ変な子どもだつたよ。いなかの子どもがどんなものだつたかと言うと、両親の後ろにピッタリついて歩くのだ。ウランバートルに人が多いことと云ったら、バザルワニ（サンスクリット語で Vajra Pa: ni、もともと金剛手菩薩の意、「なんてこつた」の意味に使われる感嘆詞）、ホムパド、そりゃあとても多くてね。17歳の男と言え、いなかでは、もう妻をもらつてしまう年ごろだよ。それなのにウランバートルに来て、外出すると、どうも迷子になりそうでいけない。そんなわけで母の裾をつかむのだ。迷子にならないように、母の裾をつかむ。立ち止まると、キセルを取り出して吸う。地面に座り込んでね。そんなことは気にしない。例のキセルをブーツから取り出して一服する。母が歩き出すと、それをまたもとに戻して母の民族服の裾をつかんで進んでいくのだ。いやあ、いなかの子どもときたら、おかしなものだつた。そうでもしなければ迷子になりそうでだめなのだ。頭がクラクラして、おかしくなってしまうのだ。そのころ、ウランバートルにはどれくらい人がいたのだつたかなあ。10万近くいたのかなあ。頭がクラクラしてね。人がとんでもないくらい多いように感じていた。

ウランバートルに来て間もないころに起きたことで忘れられないことが1つある。そのころ、同郷の知り合いやら、兄弟たちのところへ訪ねると、何年ものあいだ会っていないのだが、父方の兄、弟たち、という具合にいたのだよ。行つた先の家でご飯が出る。ポーズ（蒸し餃子風モンゴル料理）とか、ホーショール（焼餃子風モンゴル料理）なら食べるがね。野菜料理という恐ろしいものがあつたのだ。バザルワニ、臭いと思ったらありゃしない、家庭ではたいていジャガイモやニンジン、キャベツ、カブラの入つた料理を作る。その臭いと思ったら、なんとも言えない。まったく食べるなんてできやしない。行つた先の人たちは「食べる。食べる」と勧める。父とか母は食べるのだが、私はぜんぜん食べることができずにいた。私はごく最近になるまで野菜入りの料理なんて食べられなかつた。だいたい気持ちの悪いものだと思つていた。あるとき、妹と2人で遊びに行つたときのことだ。みんながぷっくりした赤いものを食べている。見ると、美味しそう。美味しそうに食べている。それで妹に言つた。私の下は妹だつたのだ。私よりかなり年下なのだがね。「いや、この人たちの食べているものは、ほら、あのリンゴというもののようだ。2人で1つ食べてみるか?」と言つたところ、「そうしよう!」と言う。それで、1つだけその赤いものを手に取つた。1つだけ取つた。私は年上だからね、妹より先に取つて噛んでみたら甘つたるくて、まずいなんてものじゃない。妹に「ほら、お前食べる」と言つて渡した。妹は一口嚙

んで吐き出してしまった。「どうするのよ、お兄ちゃん。食べられないよ」。そうしたら、それはトマトだったのだなあ。バザルワーニ。それ以降はそういうようなものに近づくのはよしたよ。こんなふうだったよ。

そのころのウランバートルで目につく高い建物は、第1学校（10年制）だったよ。第1学校の脇にはチョイバルサン元帥の公邸があった。今の師範学校の校舎は政庁だった。ウランバートル・ホテルの脇だよ。大学のほうはそのままそこにあった。今の政庁はなかった。その代わりに、ブムブグル・ノゴーン（丸い緑）という名前で知られていた劇場があった。その建物は40年代に火事で焼けてしまったよ。

K：その劇場に行ったことは？それはどんな感じのものだったのですか？

D：行ったよ。劇場っていうのは、そりゃ素晴らしいものを感じたよ。地方からやってきた人間が見るとしたら、まさしくあれだよ。映画も見る。私は父と母について行くんだった。子どもが観るのもたいへんだった。規則が厳しかったからね。子どもが観てはいけない劇というのがあった。殺し合いとかがあるものとか、戦いがあるものとか、愛とか恋とかいうテーマをもつ劇には子どもは入れさせなかった。普通の教育的な劇には入れさせるがね。私は母と父について行って、何度かその劇場に入ったよ。ブムブグル・ノゴーン（丸い緑）は誰の設計と言っていたか。外国人の誰かの設計だったと言うがね。ロシア人ではなかったようだ。ドイツだったか、西ヨーロッパの誰かある人の設計で建てられたものだった。まあこんなふうにして、私はウランバートルが素晴らしい場所だということを知った。来た次の日に、その高い建物を見た。

私の兄のいた家には子どもが1人いた。私と同年代くらいのがね、その子どもについて行って、鉄道というものを見に行った。鉄道というのがどういうものか私は知らなかった。その当時、ウランバートルの中に鉄道ができていたのだ。ナライハからウランバートルまで通っていた。今私たちがいるこのあたりにセルベ橋があった。今の橋よりも南に橋が1つ架かっていた。鉄道はちょうど今私たちがいるホテルのこのあたりを通過して、ナライハから中央発電所のほうに走るのだ。いつも石炭を運んできていた。例の子どもが鉄道はこの付近にあるが、見たいか？と言うのだ。「見たい」と言った。そんなわけで私を連れて走って行った。すると、2本細い鉄を指差して、「これだよ」と言う。「いや、こいつが鉄道なのか」と聞いた。「これが鉄道じゃないか」と言う。私がどんなふう理解していたかと言うと、幅がとても広い鉄が敷き詰めてあって、その上を車とか自動車とか、そのほかどんなものでも通ることができるものだと想像していた。すると、2本の細い鉄を指差す。そんな具合に私は鉄道というものを見たのだ。

3 人民革命25周年記念ナーダム

それから、間もなくして人民革命25周年記念のナーダム（国家祭典）がおこなわれた。そのとき、私は初めてチョイバルサン元帥を見た。1946年の7月11日にナーダムがおこなわれた。当時は5〜7日間ナーダムがおこなわれた。今では2〜3日しかおこなわれていないがね。革命が終わって直後のころは10日間ぐらいナーダムをしていた。こうしてナーダムに見物に行ったよ。めかしこんで行った。私の親戚に、教育を受けたある婦人がウランバートルにいてね、そこに行って泊まったら、「ナーダムの時に着なさい」と言って、かわいいボタンのついたシャツと、ここのあたりにボタンの付いたズボンをくれた。それで25周年記念にめかしこんだというわけだ。私が初めてヨーロッパの服を着たというのがその時だ。ブーツも革靴も手に入らなかったのだがね。父が出かけて行って、どこからか、コンピナートかどこかだろう、店をまわって労働用のブーツを1組買ってくれた。それを履いて、25周年に洒落こんだよ。このことは、私の心からどうにも消えないのだ。初めてそんな服を着てみたのだからね。

そのブーツには色なんていうものはついてない。そいつに毎朝、墨を塗るのだ。ヒツジの尻尾の油を塗って、墨を塗り続けるのだ。そうしておいてから、ちゃんとピカピカになるまで磨くのだよ。夕方、脱ぐときはたいへんな代物だった。工場でそういうもの生産されていたのだろうな。モンゴル人の足にはまったくあわなかった。とても胴の部分が細くてね、下にいくとかなり余裕があるのだがね。胴がとっても細いものだから、胴の部分に足が入らない。入ったら今度は脱げない。当時、いなかから来た人間には恐ろしく面倒なものだった。ノミというのがいてね。日本にも昔はノミというものはいたと思うが、もう今ではこの世には存在しなくなったがね、ノミという実に恐るべきものがいてね。飛び跳ねる。とくにいなかからやってきた人間を集中攻撃する。私は足を噛まれて、夜になるとそれを搔いて、傷だらけになって、その胴の細い靴を履いて1日中歩き回るものだから、夜脱いだときには、皮膚がひっついてるのだ。そんなふうにして25周年記念というのを見物した。

あのとき、私は初めてチョイバルサン元帥を見た。とてもたくさんのメダルをつけた人だった。もちろん遠くから見ているのだ。近くから見ると可能性なんてなかった。いなかの連中というのは元帥をとっても尊敬するものだった。チョイバルサン元帥を一目見るといのはね、昔の革命前にボグド・ゲゲーン（活仏）を見るのと変わらない。革命のころ、元帥を一目見ればそれでいいという感じだった。お祭りのころはたくさんの人と車で、ほんとに素晴らしかったよ。

17歳の子どもと言うのはね、かなり大きいものだ。早く行って見物したくてしょうがなかった。母や父についていったらね、先に進んでくれない。ある場所に行ったら、それきりそこに居座ってしまう。そんなだから、「私は先に行って見てくるよ」と言っ

た。「迷子にならないでしょうねえ」と言う。「大丈夫だよ」と応じた。私はウランバートルに出て来て2ヶ月たっていたし、それにスーツもどきを手に入れて着ていたからね。飛び出して行ったのだよ。ウランバートルに来るとき、私はモンゴル靴を履いて出てきた。そのまま母と父から離れて行ってしまった。いろんなものを見た。行進も見たし、あと何があったかよく分からない。日も沈むころになった。母が見つからない。郡だったら、すぐさま見つけるのだがね。捜しまくっても見つからない。その、何千人という人だからだから母を探し出せないのだ。そんなふうにして迷ってしまった。さて、どうしたものかと考えていた。そこで防衛庁を捜すことにした。当時各省にはそれぞれ保養所というものがあった。家を建てて、そこでは省で働いている人たちが訪れる。そのころは実におもしろかったのだ。省で働いている人たちは、お祭りの5、6日間をそこでよく過ごしていた。国家機関で働いている人たち、彼らの家族の食事代は無料だ。そこでは寝泊りもできる。それで私はその晩父と母を見つけることができなかったので、恐かったよ。それで苦肉の策で「防衛庁はどこですか？」と人に尋ねた。そこに行くと、軍のお偉いさんが1人いた。その人から兄の居場所を聞いた。自分が迷ってしまったことを伝えた。その人は兄を見つけ出してくれた。それから3日間、父と母には会うことができなかった。こんな具合にして25周年記念を見物した。

そのころ、いなかからお祭りに来た人は通行証のようなものを持っていた。今はそんな許可証なんかはないがね。我が郡のアナンド・パーワンが妻と子ども2人と一緒に旅行しているのは真実であるといった意味の印鑑が押された証明書があったのだ。こういう証明書をもらってウランバートルに行くと、25周年記念に合わせて、1反のダーリンバをくれた。ダーリンバというのは、モンゴル服を作る半分ワタが入っている木綿のことだ。最近では、ここではスローガンなどを書くようになって、ダーリンバでモンゴル服を作ることがまったくなくなってしまったようだがね。その証明書を見ると、ダーリンバのほかにも、刻みタバコ1本とお茶1箱といったこの3つのものをくれることになっていた。父はこういうものをくれると言うのを耳にして、私をつれて出かけて行ったのだ。お祭り見物とは、ものは言いようで、1日中それをもろうために列に並ぶ。何百という人が列に並んでいた。朝から並んで、並んで、夕方ころ1枚の切符をもらって店にもって行って、それを渡して、そこからお茶とタバコとダーリンバの3つをもらっていたのだ。この3つのものをもらうというのはね、かなり大きなことだよ。いなかだったら、そんな品物は手に入らない。第2次世界大戦が始まって、ソ連がモンゴルに供給していた小麦とか米とか茶とかタバコは供給されなくなった。人に物資を援助するどころか、彼ら自身、ドイツ人たちと戦うので精一杯だった。いなかにはお茶がなく、緑色の葉っぱを摘んで、それを乾かしてお茶にして飲んでた。もしくは木の皮を砕いて茶にしていた。日本でもそうだったかもしれないが

ね。庶民の昔ながらのやり方だよ。ホルガンチフと呼ばれるタデ科の植物 (*rumex*) を摘んで、乾かしてタバコにする。そんなわけだから、いなかから来た人間にお茶1箱とタバコ1箱というのはね、えらく大きなものだよ。祭りも終わって、ある日、父が「あそこにお茶とタバコの引換券が捨てられているらしい」と言うのだ。

そのころ、飛行場よりもこちら側の広場ではどこでもナーダムをおこなっていたのだがね。そこでは展示場とか商店とかがたくさんあった。ちょうどそのあたりに、大量の引換券が捨ててあると父が言う。ナーダムもすっかり終わったところだよ。2人でそこに行って、人が捨てた引換券を拾いに行った。そこで私たちはバスと馬車に乗り継いでヤールマクに行った。1日中こんな木の棒をつかんで、その建物の下のあたりを、こんなふうにして根掘り葉掘り探してまわった。父と私2人で探したところで、引換券なんてあるものかね。私が大臣だったころ、私の家はヤールマグ(地名)の向こう7~8km先の山のなかにあった。その場所をヌフトと言う。私たちはそこで約30年間過ごした。大臣だったころ、仕事がひけて、子どもたちを連れて、いつもそのあたりに行っていた。行くたびに、父と一緒にお茶とタバコの引換券を探していたことを思い出すのだ。それで私は子どもたちに、「お父さんはなあ、まあなんとか人民のおかげで大臣になって、車に乗って、お前たちは私の車に乗っていい暮らしをしている。だけどお父さんはここで、父と2人で引換券を捜しまわって1日中歩き回っていたのだよ」といつも言っていた。そのことがずっと忘れられないでいた。そこに行くたびにいつも思い出していた。ものが本当に少なかった時代じゃないか。

そのころは、今の白いパンなんてものはなかった。そのかわりに黒いパンがあった。白いパンは本当に少なかった。私は初めて白いパンを食べた。そのころ、第18店といって、お偉いさんたちの出入りする店があった。ある親戚の人がその店に出入りしていた。その人が私に丸型の白いパンを買って来てくれたのだ。味もまったく違ったり、色だってまったく違った。それほどパンは少なかった。

L: そのころ、店で売っていたものを思い出せますか? どんなものを売っていたのですか?

D: 食料品は本当に少なかったな。あるものといったら、たいていロシア製のものだった。砂糖はあった。日用品はそれほどたくさんなかったと思う。そういうわけだから、閉まった店とか引換券があったのだろうな。高価なお茶などがあったと思う。百貨店という高い消費者協同組合によく入っていたよ。お祭りが終わると、いなかから来た人は帰る支度を始める。8月のちょうど今ごろだ。両親はいなかに帰るというので兄弟たちを訪問していた。私も、ナーダムは見たし、兄とも会ったし、満足だ。帰ろうと思っていたのだ。

4 専門学校の予備クラス入学

私の兄ゴンボスレンは私の人生に大きな役割を果たしたのだよ。ある日、兄は「もうこいつは17歳にもなった。それなのに読み書きもろくにできないし、何の教育も受けていない。小学教育も中学教育も受けていない。そんな子どもを連れて行ってどうなる？この学校に入れたらどうだ？」と言う。そして私に聞くのだ。「おい、ここで学校に入ったらどうだ？17歳というのは中学校を卒業しているくらいの年頃だ。かなり年をくっているということだよ。兵役に行くだけでほかには何も無い」と言う。私も、この美しいネオンのともった建物があって映画もあるウランバトルに残りたいという気持ちになっていた。けれども、母や父と離れ離れになるなんて、あんまりピンとこなかった。よくよく考えて、入る学校が見つかるなら残ろうと決めた。そして父と母に相談した。「私をここに置いていくと言ってよ。私はここに残って、なんとかして学校に入るよ」と言った。こうして父と母と妹の3人は帰ることになり、私は残った。

そして兄が学校を探してくれた。しかし私を入れてくれる学校が見つからない。およそ出遅れているからね。入ることのできる学校を探すとたいい小学校の1年生だ。そんなところに17歳の男がどうしたって入れるものじゃないよ。それにタバコは吸うし、ほとんど嫁をもらうような年齢なのだから。そういうわけで小学校に入るには年齢が合わない。中学校に入ろうとすると、今度は小学校を卒業していないからといって採用しない。唯一入ることのできる学校はテクニコム（技術専門学校）だった。テクニコムというのは今あるのか、無いのか。その当時、テクニコムといって、中等教育をする学校があった。それで、何らかのテクニコムに入ろうと決心した。それでもテクニコムでさえ、学校を卒業した人を採るのだよ。学校を卒業していないから、裏口を使わなければならない。知り合いが必要だ。たまたま兄は同郷の人と出くわしてね。その人は医療技術専門学校で働いている人だった。その人に「弟が学校に入るつもりでここに残ったら、入る学校がなくてね」と話すと、その人は「お宅の弟さんを自分のところの学校に入れてあげよう」と言った。

ある日、兄がとてもうれしそうな顔をしてやってきた。「お前を学校に入れることになった」と言う。「どんな学校？」と聞いた。「医療技術専門学校だって」。「それなら入らないよ」と私はつぶねた。医療技術専門学校を卒業した医者が1人我が郡にいた。その医者といったら、しない仕事というものが無い。いつも傷や病氣、注射してばかりいるように思っていたのだ。その人のしている仕事を思い出せば、医者になりたい気なんてさらさら起こらなかった。実際にはいなかで有名なオチルバト医師で、とても徳のある活動をして、地元の人びとから生きた仏として尊敬されていることを後に知ったがね。当時、モンゴルでは伝染病がとても多かったよ。この人口は革命

前には60万人、今は240万人になっているだろう？私が地方にいたころは、ソ連から大規模な隊が来てね。全人民を1人ずつ診療して、父や母、兄、姉といった成人した人をみんな服を脱がせて診察して、梅毒予防の注射をした。この伝染病というのは恐い病気なのだ。モンゴル人を根こそぎ絶やしかけたよ。今では君は、モンゴルで鼻のない人をほとんど見かけないだろうがね。その病気にかかって鼻を落としたものだよ。よく覚えているよ。私は子どもだったがね、私の故郷には鼻のない人がたくさんいた。そういう病気がモンゴル中にあった。モンゴル人は絶滅の危機に瀕していたのだよ。この病気と戦う医療隊が派遣されるようになってから2~3年のうちに撲滅されたがね。それでモンゴル人の健康が回復して、人口が増えたのだ。最近では、また昔の状態に逆戻りしているようだ。私を「医療技術専門学校に入れる」と言うので、「絶対そこには入らない」と言ってね。「いやだ。家畜を放牧するよ。私はそれなら父と母のところに戻る」と言った。すると兄は、「じゃあそれなら、別の学校を探そう」と言った。

そうこうしているうちに兄は労働奉仕にかり出されるようになった。これはトール川付近の材木をウランバートルに必要な分を流してくる仕事だ。あれはそんなにも大きな川だったのだよ。筏を知っているかい？筏というのは木を組んで、水の上に浮かべて、前方に1人、真ん中にもう1人乗って、こうやってこいでね、進んで行くのだよ。今では、トール川はところどころで途切れているだろう。私がウランバートルに来た当時は、筏で通行していたのだ。私の兄はまだ若く、ちょっとしたお偉いさんだったのだよ。それで防衛省で働いている者は木材調達に1ヶ月かり出されていた。筏はね、その材木をかなり上流のほうに行って調達する。トール川を遡って行って、筏に乗って帰ってくる。こんなふうにして材木1年分を調達していた。私は君のモンゴル語の語彙を増やすのに役立っているだろう？兄はある日、「兄さんはこれから筏仕事に行くことになることになった」と言うのだ。筏には若者たちだけが行くのだよ。兄は若かったからね。私の学校は見つからない。兄は筏仕事に行くことになっている。兄と私は人の家に住んだままだ。自分の住居というものがない。「さて、どうしたものか」と話し合った。

兄の上官でツェデブという人がいた。今もその人は生きているがね。私は時々行って挨拶するのだ。そのツェデブという人が、部長だったのかな。私はよくは知らなかったがね。係長だったか…。兄が私を防衛省に連れて行って、そこで上官に引き合わせてくれた。上官は兄を仕事で派遣しようとしているから、もちろん会ってくれた。「上官、私はこれから労働奉仕でかり出されます。これは私の弟ですが、どうかこいつをどこか学校に入れてやってくれませんか」と頼んだ。ツェデブ氏にこう言っただけで、兄は行ってしまった。

その当時の専門学校といたら、一般教育として7年間の教育をするところだ。8月も終わろうとして、学校がちょうど始まるうとしていた。そんなわけで、ツェデブ

氏とはほとんど毎日のように会う。むろん、私を省に入れるなんてことはありゃあしないよ。防衛省の入り口のところに行って、呼んでもらうのだ。ツェデブ上官が出てくる。ツェデブ氏は私をこの経理専門学校にプッシュしてくれたのだ。戦争が終わったころだったから、軍の偉いさんたちは、その当時、かなり大切にされていた。ところが、学校に入るとき、またもや面倒なことが起こった。ツェデブ氏は、私の学校の学科長のタガルという人と私を引き合わせたのだがね。私は生まれて初めてブリヤート人に会った。君は、ブリヤート人に会ったことがあるかね？ブリヤート人はたいへんなのだよ。言葉が判らないからね。いなかの人間にとっちゃあ、もっと判らないよ。アクセントがあってね、発音も違うのだ。その人は、年も取った人だった。私は理解できない。それでツェデブ氏から「この方は何とおっしゃっているのですか？」と尋ねた。すると相手が怒って「モンゴル人がモンゴル語で話しているというのに、君はなぜ判らないのか？」と言う。それで、ツェデブ氏が話をしてくれた。「この子はいなかから来た子どもだ。ご両親はもう戻られてね。兄さんのほうは役仕事で1ヶ月間出かけて行ってしまった。学校に入学させる件を私に任せていってね！」と話してくれた。すると、私のように教育を受けていない子どもがいると言う。そこらじゅうにいただろう。そういう子どもたちは小学校さえ卒業していないが、そのくせ学校に入りたいと思っている。年齢もかなりいっている、と言う。するとタガル先生が「試験に合格すれば、この子を予備学級に入れることはできる！」と言う。今、専門学校の予備と言うと、私のところの息子はビックリするのだが、単科大学の予備学級ならあるが、それなら話は別だ。総合大学、単科大学の準備クラスというのがあるだろう？それなら、また別の話だ。その当時は、専門学校にも予備学級が創設されていたのだよ。私のような、学校教育を受けていない、いなかの子どもたちを対象にしたものなのだろうな。「予備学級に入るといっても試験はする。試験に受ければ入れるが、受からなければおしまいだ」と先生は言っている。それで、翌々日に試験を受けることになった。私は行った。試験は2科目だ。算数と国語。国語はよくある“書き取り”の試験だ。先生が言うのを書かせるのだよ。私はさっき言いたいなかでバグの教室に通って教わったし、その後は郡の教室にも通って教わったし、それにいなかの教室で教えるのも数ヶ月やってのけた人間だからね。悪くはないじゃないか。新文字では及第点を取ることができた。算数のほうはかなり不得意だった。「25たす30は、いくつですか？」「55です」って答える。「50ひく20は、30です」ってまた答える。こんなふうには100以内の足し算引き算はよくできた。でも100以上になると、できない。掛け算や割り算になると、もうさっぱりだ。「7掛ける7は？」と言え、できない。「15割る3は？」というのも、またできない。こんな掛算や割算になると、頭がクラクラしてくる。こんな具合に、新文字の書き取り試験で及第点の3を取った。算数はゼロで、それは無理もないことだ。だって、小数の区別もできないのだから。小数

なんてものを私はまったく知らなかった。「試験を受けた人は、明後日来なさい。この黒板に合格した人の名前を書きます。明後日、それを見に来るように」と言う。経理専門学校は今あるところの向こう側にあった。翌々日、走って行ったよ。名前はまだ出ていなかった。私はとても早く見に行ったのだ。学校に入れるものだとウキウキしていたからね。先生たちが集まる時間にはまだなっていないようだ。そうこうするうちに9時になってね。人が1人出てきて、例の黒板に名前を見ながら書きはじめた。名前をずっと見ていたが、私の名前がない。落第が明らかになって立ち去った。

いなかの子どもは処世術には少々長けていたと言えよう。いなかで16~17歳と言えば、家畜は放牧するし、家の仕事はすべてやるし、タバコも吸うし、酒も飲む。父に次ぐ家の主人となっているのだよ。そんなわけで、処世術には少々長けていたのだよ。それで考えてね。「試験に通らなかった。これからどうしようかな」とね。委員長のツェレン先生のところに行った。合格しなかった旨を告げてね、そのときにやっと、私の試験結果がどんなものだったかが判ったのだよ。「そうだな、君は書き取りのほうはいい。けれども算数のほうは、それこそ足し算と引き算をちょっと知っている程度だ。掛算と割り算は知らないようだ。小数はまったくできないということだ。君は算数で落ちた」と言う。つまり、私は予備科さえ合格できなかったというわけだよ。そういう状況で、私には相談する兄も、ほかに親しい人間もいない。父や母はいなかに帰ってしまっていたから、自分でよくよく考えたのだよ。それで、先生に頼んだ。「先生！」ってね。そのころ、先生の名前もろくに知らなかったのだよ。「私はとても遠方から来ました。オプス県は私の故郷です。かなり遠方です。もうそろそろ冬になろうとしています。兄は筏の労働にかり出されてしまいましたし、父と母は故郷に帰ってしまいました。私は1人で他人の家にいます。お金もないし、ご飯もないし、こんなたいへんな状態なのです。私をどうかこの学校に入れてください」と言った。するとツェレン先生は言う。「じゃあ、このことについて私たちは話し合ってみましょう。私1人では決められません。試験官の先生たちと話し合ってみよう。君は明日ここへ来なさい」と言うのだ。

翌日までかなり長い間待ったように感じた。何とかやりすごして翌日出かけた。何人かの先生たちが座っている。例の試験官の先生たちだよ。ツェレン先生とデジドマー先生とドルマー先生とダシャー先生たちだ。「私たちは話し合った。見かけたところ、君は利発な子どもだ。入れば勉強できるかもしれない子どもだ。もっとも、君にはどんな準備もないからね。だから君は予備学級で半年勉強しなさい。半年というのは1月1日からだよ。引き続き9月から半年勉強するんだ。もし半年のあいだで君の成績が悪ければ、そのまま退学だ。そうなったら、故郷に帰るかどうするかは君が自分で決めるのだ」。そのころ冬になっていた。ウランバートルでは冬は本当にたいへんなのだよ。「よく考えてごらん。さあ、故郷に帰るか、このまま入学するか」と言う。

兄もいないし、相談する人がいなかった。それで、だめならだめで仕方ないと腹をくくって入ってしまった。

半年間は、どんな援助も無しに勉強することになった。当時はとても細かかった。学校の寄宿舎っていうものがあるだろう？寄宿舎に私は入れないと言うのだ。私自身は寄宿舎に入るつもりだった。どうしてって、自分自身、他人の家に住んでいるし。けれども試用期間中だから学校の宿舎には入れないと言う。寄宿舎に住まない子どもには、月100トゥグルグちょっとの支給があった。食費として支給されていたんだ。その100ちょっとトゥグルグも支給しないと言う。本当にまったくたいへんだったよ。それでも、半年のあいだ、成績が悪くさえなければ、これをもらえることになる。1回でも学科で悪い成績を取れば退学処分だ。ツェレン先生は、実際にとても厳しい先生でね。歴史の先生だった。

そして私は学校に入った。すると、科目ごとに決まったノートをもって行かなければならなかった。私はノートをたった1冊だけ持って行って、算数、国語、口頭文学、地理、理科、という具合に、5、6時間の授業を受けた。私はあらゆる学科のものを1冊のノートに書き込んだ。ツェレン先生はそれをよく観察していてね。「君、こんなふうには書いてはいけないよ。授業ごとに別々のノートに書きなさい。算数のノート、国語のノート、地理のノート、というふうに別々でなければ。これでは駄目だ」と言う。私は「私にはノートがありません」と言った。「じゃあ、ノートを手に入れなさい」と言う。そのころ、ノートや鉛筆だって少なかった。ウランバートルさえ少なかった。いなかんなか、もっとない。たいていは木製の黒板の上を書く。市場を駆け巡ってノートを数冊手に入れた。私もそんなふうにしてけっこう頑張った。

そのうち兄が帰ってきてね、私が学校に入ったと知って大喜びした。私たち2人は、あいかわらず他人の家に住んでいた。兄は「これから先こんな調子ではだめだ。家を手に入れる」としょっちゅう口にしてた。兄はまだ妻をもらってなかった。軍というところは物資が豊富なところだった。軍関係者の物資供給所という特別な機関があったのだ。そこが兄に家を1軒支給した。それから、私たちはその家に独立して暮らすようになった。

私はずっと学校に通っていた。経理専門学校の子備学級だよ。お昼に戻ってきて、兄の昼食の準備をする。それに、私たちのところには、同郷の人たちが4~5人来ていた。モンゴル人というのはね、本当におもしろいよ。知り合いが1人でもいればね、具体的に言うと、私がルハグワスレンのところに転がり込むのだよ。食事もそこで。金などまったく払わない。時々、自分で肉とか食料品を買ってくる。ご飯をそこで食べ続けているのだ。私の家には故郷からやって来た人が4~5人と私たち2人を合わせて、5~6人になる。私は基本的に彼らの食事係だったと言える。食事を作り、燃料も調達してくる。そのあとで勉強する。私には机とか椅子とかいうものはない。

傾いた椅子のようなものが1脚と、ちっぽけな机のようなものが1つあっただけだ。

そのころ、私たちがどうやって生活していたかと言えば、軍からもらうものがかなりたくさんあった。私の兄は中尉になっていた。当時、軍のお偉方は1日に1kgの肉が支給されていたから、1ヶ月に30kgをもらっていた。1日あたり500gの小麦粉と、調味料は、塩から胡椒から、実際、支給されないものなどない。靴クリームまで支給されていたよ。私たち10人近くの間人はね、それで食べていたのだ。私は軍の販売店にそれらを買って行って列に並ぶ。そして、そこの肉や小麦で食事を作って生活していた。

ウランバートルの冬はいなかとは違って、とてもたいへんなのだよ。いなかだったら、天幕の覆いをちゃんと二重にして暖かくする。私のところは本当にちゃんとしていたよ。それが、ここときたら、兄と私は一重の覆いしかない天幕にいたからね。冬季の間、ウランバートル人たちは床を暖房して、天幕の覆いをちゃんと暖かくする。私のうちでは一重の覆いだったから、朝起きると戸口の隙間とか壁の脇から雪が中に入ってきて雪が積もってしまう。電気コンロが無くてね、鉄のかまどが1つだけで、しかも湿った燃料で、本当に参ったよ。私の服もろくでもなくて、夏にここに来たときのままでから身体をかなり悪くしてね。肺を悪くして、熱を出して赤い顔をしていたよ。1枚きりの白いシャツの上から綿入りのジャンパー、綿入り上着があった。それを着て、ズボンという長つらしいものを履く。私はとても小柄だったから、ズボンの裾が引きずっている。そのころ、モンゴル人たちはズボンをいつもそんなふう履いていたよ。洋服をこんなふうにして、なめし革のブーツの外側に出す。私の綿入りのズボンは、なめし革の靴の外側に出している。私の身体は本当に小さかったからね。その冬、身体が本当に凍ったよ。夜、さっき話した人たちのご飯を用意してあげる。9～10時になると、この人たちは寝る。私は勉強して、夜の11～12時くらいになってようやく寝る。

それでなんとか半年の成績が出ると優でね。すべての科目で優を取った。それからというもの、私は経理専門学校で4年間ずっと優で通したよ。学級委員にもなったし、そのあとは、学生委員長にもなったし青年同盟の支部長にもなった。4年間勉強した。本当だったら、3年間だがね、予備科が1年だったから。私は1946年に入学して1950年に卒業した。私が学校にいたころ、先生たちはまだ若くてね、本当にモンゴルでも最高の教育者たちだったよ。最終的に彼らは60年代から70年代にみな功労教員になったのだからね。私の試験官だった入試委員長のツェレン先生はモンゴル国の功労教員になったし、ドルマー先生、この先生は数学の先生だったが、功労教員になったし、デジドマー先生もだ。こういった大物の教育者たちは、単に勉強だけではなく、地方から入ってきた私たち子どもの面倒も見っていた。私の予備科には20人ほどの学生がいた。私のように学校にちゃんとして行っていなかった子どもたちの学級だったのだろ

うな。私をそうした先生たちが採ろうと言って採った。本来なら予備学級には15歳以上の子どもを採らないはずなのだがね。私とは言えば、17歳になっていたじゃないか。だから、基本的に年が2つもオーバーしてしまっているのだよ。17歳なら採らないと先生は言ったのだ。私はそこで先生に頼んだのだよ。「先生、私を14歳として登録してください」とね。私はね、小柄だったから、15歳といっても通用したのだな。そんなふうにして、入学したわけだ。

そこで勉強しているとき、先生たちは学科を教えるだけじゃなくて、文化の何たるかを教えてくれたよ。私たちが勉強しているとき、半年ごとの試験と四半期ごとの試験があった。3ヶ月ごとに1回試験があって休みに入るのだ。ちょうど休みに入るころ、私の学校では外出禁止をする。ウランバートルに病気が発生したと言って外に出さないのだよ。外にいる子どもは中には入れないし、中にいる者は外に出さない。あとで聞いた話だが、先生たちは子どもたちが面倒ごとに巻き込まれないように、外をぶらつかせないようにして、校内で1日2回映画を見せる。食事がよかったから、子どもたちが16日間の休暇中、今日のような問題ごとは起こらない。そのころ、私たちは知らないものだから、病気が出たとばかり思っている。かなりあとになって、上級クラスに進学してからやっと、先生たちは病気が発生したと作り話をしていたことに気がついた。先生たちは私たちがどうやって困難を克服するかということを教えてくれていたのだ。

1994年に、この学校の創立70周年記念がおこなわれた。私たち卒業生が集まってね。それまでだって、いつもよく集まるのだがね。集まった人たちでいっぱいだった。私は、予め話をしてくれとは言われていなかった。ところが当日いきなり、思い出を話してくれと言われてね。私はそこで、さっき君たちに話したことを言ったのだ。私がどんなふうになかから出てきたか、それから学校を卒業して、ソ連に留学して、戻ってきて、党政府の幹部に入って勤務したのは、私が優れていたからじゃない。これは、学校で庶民の子どもたちを育て上げた立派な教育者がいたからこそその功績なのだ、と言った。私はそういう学校で、そういうふうにして勉強したのだよ。こんな具合に、ウランバートルに上京してきた時代も終わるのだ。

君が私から聞いたり確認したりすることがあれば、すぐさま聞かなければいけないよ。私は君の書いた記事を読んだことがある。君はモンゴルやモンゴル人の生活と環境を研究している学者さんだ。だから、確認したいことがあるなら、遠慮なく聞いてくれ。私を招いてこんなふうに来て話をしているというのが、私にはとても嬉しいのだよ。

K：こちらこそたいへん興味深いお話をしてくださって、ありがとうございます。

D：私の話している事柄は、君の興味と一致しているかね？私はルハグワスレンを知らなかったがね。私の家をどうやって見つけ出したのかね？扉のところにメモが残し

であった。「日本から来た学者が貴殿と会いたいそうです！」と書いてあった。私はルハグワスレンに、「君は私とその学者に会おうと言わない限り、何度も何度も来て私と会おうとするだろうよ。どうするつもりだ？」と言った。君が私を呼んで、会ってくれているのは嬉しいし、感謝もしている。君はモンゴルのために頑張ってくれているし、これからもそうしてくれるだろう人だから、尋ねたいことがあれば、恥ずかしがったり、気に病んだりする必要はない。私は自分の考えたことを自分流に話すだけだ。私の思ってきたことは、正しいかもしれないし、まちがっているかもしれない。あるいはまちがっている部分があるかもしれない。それは別の話だ。そういう問題があれば、気にしないで聞いてくれ。さあ、それでほかにもどういうことを話そうか？

5 党中央委員会に就職

K：学校を卒業して、その後どうされたのですか？ソ連に行かれましたか？

D：ソ連に行く前に、私は就職したのだよ。

K：そのことについて話してください。

D：私は学校を「予算会計」という専門で卒業したのだ。学校を卒業して、党中央委員会に入った。私の人生も結構おもしろいのだよ。私は国の仕事をし始めるとき、党中央委員会からスタートして、そしてそこで退職した。50年代に学校を卒業して党中央委員会の会計課で働いた。その前は、まず大蔵省に入った。私の学校というのはね、大蔵省の管轄下にあったのだ。私が入るころは会計専門学校と言っていたが。その後、会計経済専門学校になった。学校を卒業してから、大蔵省の会計監査局というところで監査役になった。いいかい？そのころ、産業コンビナートが監査されていた。その監査が終わりかけていたころだった、そこでは1ヶ月近く働いていたと思う。ある日、突然、大蔵省が私を呼んだのだ。

K：その省は、どこにあったのですか？

D：今の大蔵省がある建物にあった。そこには国立銀行もある。それからゴロムト銀行もね。以前は、あそこの下は銀行で、上は省になっていたのだ。呼ばれるままに行くと、「党中央委員会のところへ行け。そこが君を呼んでいる」と言われた。私は在学中の1949年にモンゴル人民革命党に入党したのだ。党のメンバーを党中央委員会が呼びつけているのだから、恐る恐る行くのだよ。「何かしでかしたのだろうか、何があったのだろうか。どうしたのだろうか」と考えていた。行ってみると、「党中央委員の会計課長のナンザドという人物に会え」と言う。その人は感じの良い人だったね。私と少しばかり話をした。私にはかなり年を取った人のように見えていたように思う。今の私の年齢を考えれば、だんぜん若かったがね。きっと40何歳くらいの人だったのだろうな。それから、「君をここで使うつもりだが、来るかね？」と言う。黨員を党の中央

委員会の会計課が雇うと言っているのに、行かないなどということはないだろう？それで、私を会計課の「帳簿係」にしたというわけだ。帳簿係というのはね、一番下の地位なのだよ。私と一緒に学校を卒業した連中は会計士になった。人に尋ねられて答えるのがたいへんだったよ。「君はそこで何をしているのか？」と聞かれると、「帳簿係」と答えるのが気恥ずかしくって、「会計のところにいるね…」とだけ言っていた。帳簿係というのは、今あるのかないのか知らないがね。これは一番下の仕事だよ。雑用ということだよ。その上司は賢い人だったからね。学校を卒業したばかりの人間を研修させていたのだろう。その上司のいる課には、もう1人の党員である会計士がいた。こんなふうにして、私を帳簿係として半年、1950年7月から1951年1月まで働かせてから昇進させ、会計士にならせた。その上司は私を試してもいたのだろうと思う。やらせてみて、できるかどうかを試していたのだろうね。そんなふうにして、私は党中央委員会で帳簿係から会計士になって全部で2年、つまり50年7月から52年9月まで働いた。

日本人には理解しがたいかもしれないことが1つあった。私たちはね、会計の仕事にそろばんを使うのだがね。日本にはこういうそろばんがあったかね？中国製のそろばんだよ。

K：ありました。少し違いますけれど。

D：少し違うか。ここには中国製のそろばんしかなかった。それとロシア製のそろばんだけがあった。当時、計算機というものも出てきたころだった。その計算機を「ジェルジンスク」という名前前で呼んでいた。ソ連のジェルジンスク工場で製造された機械のようだった。その計算機は、今ごろ博物館にでも入っているだろうな。それを使って計算するとき、 25×25 の計算を、2と5というように、それぞれ数字を押さえておいてから、鉄の取っ手を引くのだ。私のこの2本の指に角みたいになくなってしまったよ。鉄の取っ手はとても硬かった。1日中こんなふうになっているのだ。その機械は党中央委員会に1台だけあった。私の課にだけあったのだと思う。大きな機関だったから、そういう機械があったのだ。小さな部署には機械は入らないからね。もう1つおもしろいことがあった。これは心理的問題だがね。1日中座り続けて、その計算機で、給料とか、たいがい給料関係のものを計算するのだよ。私の友達でサンダクという者がいた。彼と私の2人は、中央委員会と一緒に入ったのだがね。彼は党中央委員会の会計課の監査をしていた。私たち2人は、さっき話したその機械で計算するのだよ。人がいる前では、そろばんでは計算しない。「便利な計算機があるのに、それを利用することができなかった」と、みなが悪く言うだろう？だから、計算機でシャルシャルと音を出していたのだよ。しかし、「この計算機は信用ならない。もし計算まちがいをすれば、刑務所行きだ」と言って、お互いに話していたのだ。だから、2人で夜に残業して、昼間に計算機で計算したものをそろばんですべて検算するのだよ。

そろばんでやり直して、正しくなっていれば、初めて安心する。人間の心理というのは、こういう性質のものだよ。機械というものをそんなに信用しないのだ。そのくせ、人がいるところでは、機械を使って計算していた。だけど、もうその機械はね、大きな機関に1台ずつある。

そんなふうには仕事を続けていると、モンゴル国立大学を卒業した4人の若者が党中央委員会にやってきた。その課もだんだん狭くなってきた。彼らとも、知り合いになってきてね。この4人が私に進学をとっても勧めていた。「こんな若い人が高等教育を受けないなんてだめだ。大学に入るべきだ！」と言うのだ。中央委員会で働くようになると、そこの職員たちは、たいてい高等教育を受けている人たちだったからね。私はまあ下っ端だからね。だけど、みんなが私に「大学に入れ！」とずっと勧めていた。

しかし、大学は10年制学校を卒業していなければ入学させていなかった。またもや難題が浮上してきたというわけだ。専門学校は、10年制学校の7年生までの教育内容なのだ。またまた10年制を卒業しなければならない、という必要が出てきたのだ。当時は、私のような中途半端な人間がたくさんいた。ウランバートルには「勤労青年夜間高校」という学校が設立されていた。そこでは、10年制学校の8~10年生の授業を3年して卒業する。昼間は働きながらだよ。夜、その学校に行く。まあそれも悪くないかと思ってね。質的には、あんまりよくないのだがね。先生もけっこう休講するし。学生たちは全員仕事についている人たちばかりだよ。出張で地方とか、その他のところによく行くからね。出席者よりも欠席者のほうが多かった。先生たちも同じで、来る人よりも来ない方が多い。まあ、どうであれ、証明書を1つ取得する必要があるのだ。とにかく、2年半通って、10年制学校を卒業したという証明書をもらった。そのときから、私はソ連に留学するために出す申請書のこととか、どこでどんな学校に留学するとか、そのためには何をすべきか考え始めた。それで、自分の専門に沿ってということだから、経済学がいいと思っていた。

6 ソ連留学をめざす

君は聞いたことがあるかね？ 国家計画委員会という機関があったのだ。その機関からの候補生として偉いさん方に申請書を書くのだ。私は党中央委員会で帳簿係、次に会計士をして、かなり多くの知り合いができていた。党中央委員会の会計士というのはね、それほど小物というわけでもないのだよ。440トゥグルグの月給をもらう、バザルワニ、大物じゃないかね？ しかし、申請書は、最初の年、どうにもならなかった。次の年の52年に再度書いた。当時は、ソ連の計画委員会の枠で、年に2人を留学させていた。52年には4人を留学させることになったのだ。

そのころの規律は非常に厳しかった。留学する人のうち2人は、10年制を卒業した

子どもを採ることになった。これはごたごたせず、直接採用するものだ。残りの2人は、仕事をしている人から採用することに決まった。それで、この2人については、今の言葉で言えば、競争となる。自由競争ではないのだ。試験をする。私は、10年制を卒業していないが、ひところを思えば少しはましになっていた。そして、受験者たちは大学に赴いた。試験をおこなっている。私も受験した。私は10年制を夜間で卒業したけれども、その学校の質は悪かった。歴史の試験があった。歴史はまあなんとかなだ。読んでいればできる。歴史の試験では及第点を取った。数学もあった。高等数学を試験している。私が高等数学など判るものかね。10年制を質の悪いところで卒業したのだからね。判るはずもない。試験官で来た先生は、のちにモンゴルの文部大臣になったイシツェレン先生だった。大臣になったあと、私は彼に、「あなたたちは、ほんとに人を痛めつけてくれたよ!」と、いつも冗談を言っていたのだ。イシツェレン氏は試験のときに入ってきて、10年生の数学問題を出したのだと思う。とても難しいものだった。私とは言えば、1問も判らない。

ちょうどその前に、私はある人と偶然に出会った。サンザイジャブという人だった。彼はレニングラード大学に留学した。彼は大学の1回生から留学していた。彼は、私の隣の席に座った。私は、試験を受けているあいだに彼と顔見知りになっていた。「サンザイジャブさんよ、それをこっちに渡せよ、写してしまうから」と言った。サンザイジャブはAを選び、私はBを選んでいて。「お手上げの問題には、君のほうのAと書いておこう。私がどこに座っていたかなど、あの先生は気づかないだろうから!」と言ってね。サンザイジャブは大学で勉強していたから、出来が良かった。1問はわざとまちがえて、2つをそのまま写して、1問は判らないのだからね、まちがえたものを提出した。すると、中(5点満点の3)の点数を取っていた。

3番目の試験はロシア語だ。私は、ロシア語はからっきしだめだ。聞き取りだった。先生が名前を呼んだ。そこで、言われたことを書く。人が1人入ってきて名前を呼んだ。「我が祖国」つまり「マヤ・ローディナ」という表題だった。言葉を知っている人だったら、簡単に書けるよ。30数単語だったから。私は、そのうち29単語をまちがっているのだからね。まったく見当はずれだ。言葉を知らないのだからね。そんなふうにはまちがうのだよ。人の発音をなぞってさえ書き取ることではできなかったよ。入試委員には、ドゥゲルスレン大臣がいた。気の毒に最近亡くなった。中央委員会の課長のツェデンダンバ氏、彼が入試委員長だった。ドゥゲルスレン氏のほかに、司法省の副大臣が加わって、それに、そのツェデンダンバ氏とで、全部で3人だった。のちにみな大臣になった。「あなたたちは人の運命を本当に痛めつけてくれた人たちだよ!」と、私はのちに彼らに冗談を言ったものだ。この人たちが名前を呼んで入室させるのだよ。仕事組から留学しようとしている人たちを1人ずつ呼ぶ。

私と一緒に受験した人にレンチンベルジェー氏がいた。計画委員会の副議長だ。も

う1人は、テムチグという人だった。私たち3人が競争していたわけだよ。レンチンペルジェー氏の場合はYu.ツェデンバル書記長が行かせろと命じた人でね。年を取る前に高等教育を身につけさせろと考えたのだからなあ。とても良い人だったがね。計画委員会の副議長なのに、高等教育を受けていなかった。ツェデンバル書記長は、人に対してとても思いやりをもって接する良い人だった。ツェデンバル書記長が行かせるようにということだったから、レンチンペルジェー氏を試験に受からせたのだ。テムチグという人がいた。レスリングのマグサルジャブ先生の父だ。内務省の会計課長で、大佐の位の大物だった。ロシア語というものに本当にずば抜けていた。テムチグ氏はロシア人たちといつも一緒に働いていた人だったからね。テムチグ氏が受かった。

4人のうちの2人は10年制学校から採用したから、何の問題もなく合格が決まっていた。1人は、Yu.ツェデンバル書記長が行かせるようにと言っていたから合格した。だから、残り1人の定員に対して、テムチグ氏と私の2人がいたから、その競争で私が落ちたというわけだ。その委員会のところに行ってみた。すると、「君、これを見たまえ。30数単語のうち29単語をまちがえている。ソ連の大学で学ぼうとしているのに、ロシア語ができない。君は向こうに行って、どうやって勉強するのかね」と言って却下してしまった。かなりのちになって1980年代に、その聞き取りテストをある人が公文書館から持って来てくれた。今、私のところで保管しているよ。

さて、すっかり8月の末になっていた。子どもたちはほとんどすべて行ってしまった。ちょっと悔しかったね。「まあ、いいか。会計士でやって行こう!」と思っていた。計画委員会の第1副大臣に、ドルマーという女性がいたのだがね。長年勤めていた女性だった。党の中央委員会と計画委員会はひとつところにあったのさ。「中央委員会とドルマー副大臣が呼んでいる」と言う。「何が起こったのだろうか」と思った。学校の問題は決定済みだったからね。とにかく、ドルマー副大臣のところに行ってみた。私は彼女のところに申請書を何度も提出したから、すっかり知り合いになってしまっていた。「いえね、昨日、党中央委員会の書記局会議がおこなわれてね。計画委員会の名前で留学する2人を批准しようとしたのよ。でも、テムチグが除かれてね。君は若いし、掛け合ってみなさいよ」。党中央委員会の書記局会議というのがあったのだ。その会議で、外国に留学する学生たちを批准することになっていた。念が入っているだろう?テムチグ氏は大物だったから、幹部たちのあいだで酒のみだっということが知られていたのだよ。「モスクワには通りごとに酒を飲む屋台があるのだからねえ。彼はそこに入り浸りになる。それで追い出されてくるよ!」と言って、除外されてしまったのだ。幹部たちは知っていたから酒のみを行かせなかった。そういうふうにならされると、1人足りなくなってきたということだろう?定員割れしたということだよ。

一時帰国していた学生たちは、ほとんど戻ってしまっていた。8月末になっていたからね。9月1日には授業が始まる。もう亡くなったがね、中央委員会の副書記長で

ダムバという人がいた。当時、ダムバ氏が人事権のすべてを握っていた。ダムバ氏のところに行こうとしても入らせてくれない。偉い上官は小物を受けつけないものだろう？「忙しいから」と言う。中央委員会の人事担当書記にS.ソソルボラムという人がいたのだがね、彼はまだ生きている。そのソソルボラム氏のところに行こうとしたところ、また会ってくれない。私の出入りできる長官と言えば、私の所属する会計課長のナンザド氏がいた。それから、官房長官のT.ロブサンデンデブ氏のところだ。やっとのことで、ロブサンデンデブ氏のところに入る。「こんなふうには定員割れしていません。私を留学させてください」と言ったのだよ。ほかにどうしようもないだろ？話を聞いてくれる幹部がいないのだから。それで、ナンザド氏に泣きついてね。ナンザド氏はとても良い人だったからね。「上の人たちと話をしてみるよ」と言っている。話すと言いつつ続けてとうとう8月も終わってしまった。

それで、去年亡くなった中央委員会の人事部長のA.ガルサンという人がいたのだけだね。そのころ、私たちは同じ事務所で働いていた。当時の公務員は、朝9時に出勤して、昼に休憩なしで、夕方の5時にひけることになっていた。5時に終わって、家に帰って食事をして、ふたたび夜8時に出勤して、11時まで仕事だ。11時以降は、そこに留まるも帰るも自分次第だ。こういう規則だった。たいへんなのだよ。私はその当時、仕事を始めたのだからね。私はまだ子どもだった。政庁は今のところに移ってきていた。政庁は、50年代に使われるようになったのだ。エルデネ・オチル映画劇場がスフバートル広場にオープンしていた。子どもだからね。いい映画が上映されれば見たくなる。それに、そのあたりを歩いて女の子たちを見たい気持ちもある。それなのに、夜間は暇がない。時々、私たちのところの者は、うまい方法を1つ使っていた。夜の8時に来て、名前を登録してから、9時か10時始まりの映画を観るのだ。そのときには、コートを手ハンガーに掛けたままにして、部屋の明かりもつけておいて、扉を開けっ放しにして出かけるのだ。そうすると、人が入ってきて、「ああ、コートもあるし、電気もつけたままだから、中のどこかにいるんだろう」と立ち去ってしまう。10時の映画を観たら、10時半ごろに戻ってくるのだよ。しょっちゅうというわけじゃない。時々珍しい映画が上映されるときに限って、この方法を使わせてもらう。そんな程度で、公務員は勝手に外出してはいけないのだ。それで、ある夕方、職場にいたら、ガルサン上官が階段を降りてくる。「おーい、おーい！君に言おうとして忘れていた。今日、書記局会議があってね、君の問題を取り上げて話し合っ、君の留学が認められたよ」と言った。私も本当に嬉しかった。そんなわけで、私はソ連留学したというわけだよ。かなり出遅れたがね。

7 モスクワでの生活

K：モスクワに行かれたのですか？

D：モスクワに行った。「モスクワ経済単科大学」つまり「モスカウスキー・ガスダルストヴェンニャ・エコノミーチェスキー・インスティトゥート」というところに留学した。当時、その学校はほかから独立してね、1つの学校として存在していた。最終的には、「プレハノフ国民経済単科大学」と合併した。私が入った学校は、最初、「プレハノフ国民経済単科大学」から独立したらしいがね。1932年だと言ったかな。その年に独立して、最終的には、60年代にもう1度もとに戻って合併して、「プレハノフ国民経済学院」になっているよ。そこに、最初に行った。とても良よかったよ。学士院会員の先生たちが教室に入ってきて何かずっと話をしている。私には何1つ理解できやしない。ロシア語が判らないからね。私は講義に出ながら、母や父に手紙ばかり書いている。今でも、私はそのノートをとってある。先生が口を動かすたびに、何かものを言っていると思って、句読点をつけていった。通信のモールス記号というものがあるだろう？私の句読点は、ちょうどそういうものだったな。私の家族は「モールス記号で書いているのか？何だ、そりゃ？」と言う。「語の意味で点を打っている」と説明する。時々、レボリュチヤつまり革命という語が出てくれば書きとめる。ストラナー（国）とか、ゴスポドストボ（支配）という言葉が出てくれば、またこれも書きとめる。こんなふうにして、その他のものは、当て推量で点をつけていくのだよ。私はそのノートを今も大事にもっているのだ。子どもたちに見せるのだ。

そうこうしているうちに、半年に近づいた。試験が始まることになった。私が知っていることなんてない。小学校や中学校でやっていたように、強制というのがないのだよ。出席するもしないも自由だから、試験を受けたとしても、成績なんてどうにもなりはしない。ますます、やる気が失せて、家もとても恋しくてね。父や母がなつかしい。モスクワというのは、天候が悪くてね。太陽など1度も見られない。まったく存在しないかのように、日中の3時になれば、もう暗くなってしまう。時々、ある講義に出ているときに、太陽が出れば、それだけでまるで父が入ってきたように素晴らしい気持ちになって、心が晴れたものだよ。「こんなふうには、外国に来て、とても苦勞して、何にも勉強しないで行くのだったら、もう止めよう」と思って、帰る決心をしたのだ。その学校にはレンチンベルジェーと私の2人が一緒に来ていたのだがね。そこで彼に、「私は国からもらった奨学金を少ししか使っていないうちに国に帰る」と言った。彼は「おい、どうしたのだ？」と言う。「私には勉強できる兆しはないからね。とてもたいへんなのだ！」と言った。モンゴルの計画委員会長のD.マイダルという人がいた。その当時、D.マイダル氏がモスクワに来ていた。「マイダル氏のところに私を連れて行って私の問題を話してくれ」とレンチンベルジェー氏に頼んだ。彼はそれ

を引きうけてね。

L：あの政治局にいたD.マイダル氏ですか？

D：そうだ。D.マイダル氏はね、閣僚会議の副議長で、国家計画委員会の長だったのだ。私と一緒に留学したレンチンベルジェー氏はその次席だった。以前の同僚であった委員長のところへ私を連れて行った。私たちが訪ねたとき、D.マイダル委員長はやっと起き出したところだった。それから3人でお茶を飲んで話をしたよ。私もまあ、その2人は以前一緒に働いていたものだから、かなり長く話をしたのだよ。1時間くらい話をした。それから、「もう私には話すことはないが、この子のことで1つ相談したい。この子は私たちの計画委員会の名前で私と一緒に留学したのだがね。もう国に帰ると言うのだ。国の金を少ししか使っていないうちに国に帰って会計士をやると言うのだ」とレンチンベルジェー氏が言った。すると、D.マイダル氏は「君はまだ試験も受けていないし、半年にだってならないのに、あきらめるなんて情けない奴だ。いったん、そう決めてきたからには、勉強するのだ、君。帰るなんてとんでもない」と言って、ガツンと叱られた。

それで、まあね。どうしようもない。そのころ、私たちの大学の修士課程でD.ツェンド氏が勉強していた。ツェンドという人がいたことを君たちも耳にしたことがあると思うがね。ツェンド氏は学校でとても尊敬されていた。モンゴル人の優秀さと能力の高さをツェンド氏は体現していた。彼は、ロシア人の学生たちに授業を教えていたよ。ロシア語の知識は驚くほどだった。先生たちのあいだで理論についての議論が出れば、ツェンドを呼んで尋ねていた。ツェンドの意見でたいい議論がおさまっていた。私たちの大学にはこんな有名な人がいたのだよ。それで、私はツェンド氏に頼んだ。「ツェンドさん、私を予備クラスに入れてください。私にはまったく歯が立たない。あの高等数学とかロシア語とか私に判るものは何もない」と言った。

当時、中国人たちが学校に留学していてね。彼らには準備クラスがあったのだ。つまり、もう1度、経理専門学校の時のように予備クラスに入ると言ったのだよ。私と一緒に留学したレンチンベルジェー氏は予備クラスには入らないと言う。彼は38歳で留学してきたのだからね。「私がもう1年勉強してどうするのだ？できても、できなくても、このまま勉強するよ」と彼は言っていた。「君は若いから、1年モスクワに住めば、君の言葉はよくなるよ。レンチンベルジェーは話が別だ。君はまだ若い。君を連れて学長のところに行こう」と言う。私たちの学長は Cholpanov という教授だった。ツェンド氏はかなり親しい知り合いのようだったな。ツェンド氏が私を連れて行くと、学長はすぐさま応対してくれた。ツェンド氏は学校でそれほど尊敬されている人だった。それから、2人は何か話をしているのだよ。ずっとロシア語で話をしている。私は何の話をしているのか、判らなかつた。かなり長いこと、しゃべっていた。私はじっと座っていた。その当時、スターリンの『経済学の諸問題』というのだった

か、そういう著作が出ていたのだ。その冬、ソ連では、これについて大々的に意見が交わされていた。彼ら2人は、その著書について話をしているようだ。「スターリン」と言っていて、話していたからね。学長と彼は1時間近く話していた。この間に、私については何も話が出なかった。そして、話が終わろうとしているようだ。立ち上がった。「さようなら」と言っているようだ。するとツェンド氏は、「学長。1つ忘れていた。この子についてちょっと話したいのですが。これはモンゴルから来た学生ですが。今年来て1年生のクラスで勉強しています。ロシア語を知りません。教育程度はだんぜん低い。中国人たちが勉強している予備クラスで勉強している中国人たちと一緒に予備クラスに入れてもいいですか?」と言った。「プロブレム、ニエツト（問題ないよ）。そこに入れたまえ。明日通達を出しておこう」と学長は言った。

そういうわけで、私は14人の中国人たちの15人目となって、予備クラスで勉強することになった。そこに、また1人朝鮮人が入ってきて、16人になって勉強したのだよ。中国人たちは、ロシア語と経済地理とソ連国民経済史という3つの科目を勉強する。私の気持ちもぐっと晴れた。ロシア語も、本当に辛抱強く勉強したよ。ツェンド氏は、「君、ロシア語を勉強するときは、わかってても、わからなくてもいいから、とにかく本をずっと読め。たくさんの単語を覚えようとあせる必要はない。文学をあきるまで読め」と助言した。

私は文学の本をずっと読み続けた。『アンナ・カレーニナ』を買ってきて、ずっと読んでいたのだ。はじめは、ぜんぜんわからない。1回読んで、2回読む。3回目になると、その語が「ヒツジ」のようになってくる。ヒツジを見分けるのがモンゴル人はうまいだろう? 私は自分のところのヒツジとほかの家のヒツジが混ざったとき、すぐさま見分ける。「うちのヒツジはこれだ」と分けてしまう。モンゴル人には、生まれつきそういう特徴があるのだよ。今でも、モンゴルのいなかの人たちはそうだよ。1000頭のヒツジが混じってしまっても、持ち主がやってきて、5人ほど奥さんたちがやってきて、別々に分けるのだ。問題なんて何もない。これも、人間の遺伝というか、そういう特質だ。ツェンド氏が本を読めと言ったので、本だけを読んでいた。

予備クラスに入って、私には時間の余裕ができた。授業はそれほどたくさんない。そうやっているうちに、だんだんと単語が判るようになってきた。本当に、本を読んでいると判ってくるのだね。初めのうちは、私はいつも辞書を持って読んでいた。丸1日勉強して、半ページしか進まなかった。それで、やめて、辞書を放り出して、地下鉄に乗っても、路面電車に乗っても、バスに乗っても、本を読み続けた。人が見ると、「ロシア語に堪能な秀才なのだなあ」と思われるくらいね。1冊の本を2、3回読んでくると、単語が判るようになる。たとえば、君と会わないでいれば、知り合いにはならないが、2,3回会うと、知り合いになるだろう? 通りでは、たいていそうだろう? 何度もすれ違って、同じ場所に通っていれば、人の名前は判らなくても顔を覚えてし

まうだろう？あとになって1度会えば、「どなたでしたか？」と言って、名前を言えば、すっかり古い知り合いになる、ちょうどそういう感じなのだ。ずっと読み続けていると、「知り合い」になってくる。それで、まあロシア語が少し何を言っているか判るようになって、予備クラスを優で終えて、そのまた上に進んで行った。予備クラスを1年、本科を5年、こうして6年間モスクワにいた。こんな経過だよ。

私の運命も、本当に変わっているよ。いなかから出てきて、ソ連にも留学して、不思議なものだ。私はいつも、私を最初に応援してくれた人たちに感謝しているのだよ。私を最初、あのツェレン先生とそのほかの先生たちが予備クラスに受け入れないと言っていたら、いなかへ帰るよりほかなかったからね。経理専門学校の70周年記念が95年に行われたのだがね。私はそこに行って、「長年、大臣をやった。国家の指導部で働いた。これは、私が優れていたからというわけではない。先生たちが優れていたからだ」と言った。そのとき、学校の先生たちの紹介があるのだがね。その先生たちは、私たちが学んでいた時のように、若い人たちだった。私とその経理専門学校に入ったころ、私は17歳で入った。ある同級生は、23歳で入ったのだがね。彼の名はバンズラグチといった。私たちの理科の教師は23歳だった。すごく気の荒い先生だった。私たちをしょっちゅう叱りつけていた。すると、このバンズラグチがそれをかばって、「子どもたちを叱るのはよせよ。いなかから来たのだ、そいつは。ものが判っていないだろう」とかばう。すると先生は怒って、「君と私が同い年だというのが何の関係がある？出て行け」と言って追い払う。「私は勉強しようと思ってきた！出て行くものか」と言い張って出て行かない。そんなふうには私たちは勉強していた。それで、その記念祭のときに、私は先生たちに、「モンゴルの子どものために、人のためにあなたたちは本当に配慮してくれた」と言った。

こういうふうにして私は2つの学校を卒業した。ウランバートルで卒業して、北に行って卒業して帰って来た。計画委員会の名前で行ったからね。そこに就職するのだ。モンゴルに帰って来て、計画委員会の専門職員になった。

8 産業大臣に就任

K：何年に戻って来られたのですか？

D：1952年に行って、1958年に戻ってきた。専門職員を1年ほどした。1959年から、計画委員会の産業課長に昇進して、1960年から産業省の大臣に任命された。この国は、産業関係の省庁が1つしかなかったのだ。あらゆる部門を管轄した省庁がたった1つしかなかったのだ。産業省の大臣を1960年から68年までやった。鉱物、電力、石炭、木材、軽工業といった全産業が集まって1つの省になっていた。

K：1960年に大臣になられたころ、あなたはおいくつでしたか？

D：29歳だった。私が大臣になったころ君は3歳だったのだよ。産業省の大臣を60年から68年までやった。省が大きくなって行って、たくさんの工場をもつようになったので重工業を独立させた。そして軽・食料工業省を作った。68年から79年までは軽・食料工業省の大臣になった。79年から90年の3月まではモンゴル人民革命党の中央委員会の書記長をした。こんなふうに私の人生の34年間は工業の発達と関わっているというわけだよ。2年間は計画委員会、2年間は党中央委員会の書記長というように、前後4年を除いて残りの30年間は産業と関連している。だから、モンゴルの産業の発展が良くても悪くても、それは私の名前と関係するのだ。

K：この時代は、モンゴルの産業がもっとも強力で発達した時期です。言葉を換えれば、モンゴルの産業はあなたとともに成長したのですよ。

D：私は、こういう機会にめぐりあえる良い時期に居合せたのだよ。1960年からの30年間で、モンゴルの産業は上々に発達したのだ。これは、私が優れていたからではなくて、私たちの党や政府が採った政策の成果だ。こうした発展時代に、私は大臣や上官になる機会にめぐりあえたのだ。

K：奥さまとはいつ知り合われたのですか？

D：大臣になったあとだよ。私は妻と1961年に結婚した。独身時代に大臣になった。母はそのころ、いなかにはいた。兄も、そのころいなかにはいた。兄と私は結婚していなかった。私は、基本的にソ連に行って初めて、建物生活というものを経験したのだよ。それ以前に、ここにいるときは、いつも天幕にいた。モスクワから卒業して戻ってきても、まだ天幕にいた。私の故郷の親戚の家にはいたのだ。そうこうしているうちに、例の計画委員会の建物が建った。今、第5学校のそばに1つ建物があるだろう？課長になったので、私を優遇してくれたのだろうと思う。その建物の2部屋付きの家を提供してくれた。計画委員会が住む建物をくれて初めて自分の家だといえる家を持ったのだ。兄はトゥブ県の党委員長になっていた。母と妹の2人が兄と一緒にそこにいたのだ。私が母を呼び寄せる。すると、兄が私のところに来て何日か泊まってから、母を連れて戻って行く。20幾つの若い大臣になるというのはたいへんなことだよ。大きな公職だ。それなのに妻も娶っていないままだった。仕事というのはね、とてもたくさんあるのだ。私は工場で働いた経験のない人間だからね。とてもたいへんだった。その仕事を管轄して向上させなければならなかった。私の入省した産業省はとても大きな省だった。私は朝から晩まで働きどおしだ。私はのちになって、当時、省で一緒に働いていた人たちのことを気の毒に思う。私は大臣で、党と政府は大きな期待をかけていたのだよ。その期待に応えなければならぬし、与えられた課題を実現しなければならぬ。だから、かなり働く必要があった。引き受けた仕事と関連するかなり多くの事柄の責任を持たなければならなかった。朝、仕事に来て、昼に休憩をとって、食堂で食事をする。夜は、妻がいないから、食事がありつけるときも、ありつけない

ときもある。時々は人の家で呼ばれる。母がいるときは、家で食事をする。母がいなければ、食堂に行くのだよ。だけど、大臣になった人が、そのつど食堂に入っているというのも、体裁がよくなかった。政庁の食堂は、昼間は営業しているが、夜間は営業していなかった。昼間は入るがね。その食堂は夜間していない。夜、大臣が食堂にいるというのも、まずい。その当時は、アルタイという食堂兼レストランがあった。食堂とかレストランに大臣が入り浸っているというのは、具合が悪いものだよ。そんなわけで、仕事場に居続けるのだよ。夜中の1時とか2時前に家に帰るということはない。

私は省に来たばかりの新人の大臣だった。そこの人たちをあまり知らない。私のもとには4人の副大臣がいた。彼らは私の父くらいの年配の人たちだったよ。私は彼らには、自分と同じように仕事をして遅くまでやれ、とは言わない。けれども、大臣が遅くまで仕事をしているからには、4人の副大臣も席に着く。4人の副大臣が席に着くと、約10人の課長も着く。課長たちが着くと、その下に働く人たちが着く。そんな具合に、その省は一団となって働くのだよ。このことは、かなりあとになってみなが私に話してくれたのだ。彼らと親しくなってきたときに話してくれたのだ。「妻も娶っていない子どもをよこすなんて本当にひどいことをしてくれる。家にも帰れなくなった。妻や子どもの顔も見ることができなくなった」と話していたのだそうだ。

K：あなたのお父さまは、そのころいなかにならっしゃったのですか？

D：父は、私が学校にいるころ死んでしまった。母はずっとウランバートルに暮らしていたが、最近、1986年に亡くなった。

9 戦前の産業コンビナート建設

K：モンゴルに最初できた工場というのは、どういう工場だったのですか？

D：私たちの最初の工場というのは、産業コンビナートだ。モンゴルには、そもそも工場というものがなかった。ゼロから出発した。まあ確かに、イヤリングとか指輪とかを作るとか、個人的な零細企業はあった。小さな印刷所とか、ナライハ市には鉱山業を営むような小さな工場はいくつかあったが、今の私たちが思い描いているような工場というのは存在しなかった。君たち、考えてもみてくれ。ウランバートル市といっても、60キロワットの電力を供給する発電所しかなかった。60キロワットなら、今のモンゴルのいなかの牧民が発電しているものだよ。60キロワットが発電機1つ分なのだから。1924年に、ウランバートルの発電所の生産量は、60キロワットだった。今、日本人はモンゴルで発電機を買い求めているだろう？その程度のものじゃないか。24年の最初の発電所は、こういうものだった。それで産業コンビナートを創設したのだ。

K：それはいつ建てられたのですか？

D：1928年から29年ころ、建設作業は始まった。稼動し始めたのは、1934年の3月24日だ。これはこの国の産業基盤になった。そのコンビナートのなかには4つの組み立て工場と製造所があった。フェルトや、なめし革のブーツや、羊毛布や、なめし革を作っていた。なめし革で、私たちのところではモンゴル靴や、鞍褥を作っていた。それに加えて発電所をさらに作ったのだ。その発電所は、さっきの60キロワットではなく、1500キロワットになって、立派なものになっていたよ。これを建てて1934年から稼動した。コンビナートが建った場所は君たちも知っているだろう？飛行場から、市内に来るところにある区域だ。

当時、ウランバートルとこのあいだは野原だった。そのころの写真を、1971年そのコンビナートを初めて建てていた人が私にくれた。ロシア企業団の副長官だった。私が大佐だった1971年に、彼はアルバムをくれた。コンビナートが初期にどのように建てられていたかについての、とてもおもしろい写真だった。この国の公文書館にはない写真がそこには含まれていた。1929年だったか、30年だったかに、コンビナートの起工式がおこなわれた。その写真集には、起工式からの写真が撮ってあった。それを見ると、当時、初めて工場が建てられているのを見ようと、ウランバートルの人たちが集まっている。概して皆、起工式に参加するのを名誉なことだと思っていたのだね。自分の国に初めて、工場を建設する基礎工事に、ラマ僧や軍関係者などいろいろな人たちが参加していたのだよ。

モンゴルの産業がどうやって発展したかを話せば、数日は話せるよ。だから、いくつか数字を言おうか？数字には関心があるかね？

K：あります。

D：じゃあ、それでは、1934年に、産業コンビナートが始動しただろう？それから戦争になった。戦時下で発展するものはない。けれど肉コンビナートを1つ建設した。地方では、戦時中、全国に乳・バター製造班が作られた。私の郡でも、乳・バター製造班が作られたのを私もよく知っている。1940年代に、初めて何軒かの家が一緒の場所に宿営して、乳をしぼって、手動式の機械でツツギー（サワークリーム）を作って、ツツギーを原料にしてさらに機械でツツギーのバターを作るのだよ。今はマースロと呼んでいるがね。これは、そのころから発達したものなのだよ。モンゴル・ツツギーのバターは、今、このウランバートルには見られないけれどね。1946年には、5500トンのツツギーのバターを作っていた。そのころ、モンゴル人たちはパンをあまり食べないから、ツツギーのバターはあまり使われなかったので、5000トンは輸出していた。

今ではツツギーのバターを作る場所はすべてなくなったよ。これらすべてがなくなって、家畜も台無しにして、雌ウシを搾乳しないまま過ごしているのだよ。なぜ、私たちが今日ドイツやデンマークやロシアの植物性マーガリンを食べているのかね。歴史を知らない人間はこんなふうだったことを知らないのだよ。5500トンのバターを

モンゴルは自給できていたのだよ。それで、そのころは、ツェツギーのバターをそんなに使わなかったから輸出していたのだ。そのころツェツギーのバターは、1kgが12トゥグルグだった。

10 戦後の産業発展

こうして戦争が終わった。1948年にモンゴルは第1次5ヵ年計画を承認して、多年的計画をもって発展してきたのだ。その当時、工場のいくつかは建設され始めていたがね。とくに、これというものはなかった。ここの産業が発展した中心的時代は、私が大いだったころなのだよ。私は自分のことを幸運な人間だとも思うのだよ。私は工業の技術者でもないし、経済学の間人だからね。その当時に、私をそうした工業部門に配置したのだ。私には当時、経験もなかったしね。最近モンゴルに現れている民主化路線の人びとがいるだろう？彼らは「自分たちは、若々しい大臣だ。自分たちは優れている！」と言っている。けれども私は29歳だったのだからね。党と人民が私に信頼をよせてくれたし、私はその信頼と期待に応えようと、すべてを賭けたよ。時期的にちょうどまく合ったのだよ。

この時期、党や政府は、とくに1966年に開催された第15回党大会で、モンゴルを工業と農牧業の国にするという指針を出した。1966年ころから、モンゴルの産業の発展はとても加速された。その当時、課題はたくさんあったよ。まず、牧畜で取れる原産物の加工と地下資源の活用の方向性が強く打ち出され始めた。君もよく知っているだろうがね。ここの党大会は、開かれるときに、次の5ヵ年計画の指針が承認されていた。どんなふうにして、どんな目標に達するのといった指令が出る。その指令ののっとなって、5ヵ年計画を作って、その計画を人民大会議の席で批准していた。そのようにして、その計画案は法的なものになる。その計画に沿って仕事を進めていた。この時期は、私が大いだったころと恐いくらいピッタリ重なって、私も持てる力を総動員していたよ。肝腎なのは、私の努力というよりも、たくさんの優秀な幹部たちが下準備をして、ここの労働者階級が生まれてきたということだ。

産業の発達をいくつかの数字で言ってみよう。私たちの国の産業は、1940年に、86年の価格で、おおよそ1億1600万トゥグルグを生産していたことになる。この数字は、1989年に、91億8100万トゥグルグに達した。どうかね？産業の発展を見る中心的指標は、生産物だよ。何を作り出したのか、というね。増加率を見ると78倍、ほぼ79倍の増加だよ。40年の時を100とみると、60年以降に7900に増加したということになる。これは、かなりすごい数字だろうと思うのだよ。60年以降に、すごい増加があったことが判るのだ。1960年に7億1500万トゥグルグの生産高だったのが、89年には100億近くになっているのだよ。国民総生産に占める工業生産高の割合という統計数値があるだ

ろう？私が大臣だったころ、国民総生産に占める工業の割合は、20%だった。それに対して、1989年には、ほぼ50%、48%を占めるようになった。これはすごい勢いで増加している表れだよ。基本歳入という重要な指標がある。60年に、私が大臣になりたてのころ、基本歳入における工業の占める割合は、9.6%だった。89年には、34.1%になっていた。これは決定的意味をもつようになったということだよ。資本投下からいうと、60年に5億4000万トゥグルグの投資があったのだが、89年には160億トゥグルグの投資があった。国の国民経済に対する全投資額の50%が、工業部門にあてられていた。言い換えれば、工業を発達させないで、牧畜だけでやっていけないということが明らかになった。家畜からは肉を取る以外にはない、とも批判が出ていた。この肉を加工する必要があるし、皮革加工する必要もある。この時期にどんな工場が建設されたか？例を言おう。

以前は、皮革は未加工のまま輸出していた。それを加工して、具体的に言えば、牛革を加工して、靴底を作るようになった。ヒツジの革は、500万出ていた。ヒツジの革で何を作るかと言えば、なめし革の服を作る、シャツを作る。ヤギの革では、もっぱらなめし革の靴を作るようになった。こういうふうにして、毛や革すべてを加工するようになったのだよ。以前、モンゴルではほとんど洗毛もしないで輸出していた。けれども、私たちは洗毛をしてから、加工して、国内の人たちにとって一番の必需品であるフェルトを作るようになった。天幕用のフェルトも作れば、フェルト製の靴も作る。最後には、毛織物を作るようになった。そして、絨毯を作るようになった。カシミヤを加工して製品を作るようになった。こうしてみると、どんどんと発展していったことになる。私が大臣だったころ、産業には5万人の就業者がいたが、89年には2倍に増えて12万人になった。この数字から、この部門でどれくらいの増加があったかが分かる。多くの部門で示せと言われると時間がとてもかかる。ここでは単に、総計した数字を取り上げてみよう。

ここにある経済学者たちが作成した2つの数字があるから見比べよう。60年代には1億6000万キロワットの電力を供給していたのが、90年には33億4700万キロワットになった。私が大臣になっていたころには、ここには発電所が1つしかなかった。それが今ではとてもたくさんの発電所があるだろう？60年には、60万トンの石炭を産出していたのが、90年代には70万トンを産出するようになった。銅は、以前には採掘されていなかったが、70年代から約30万トンの採掘がおこなわれるようになった。モリブデンや螢石の採掘も以前はなかったが、これらもまたおこなわれるようになった。またモンゴルにはセメントがなかったのに、44万トン以上のセメントを生産するようになった。今は、このうちのどのくらいを作っているのか知らないがね。

牧畜国なのに、私たちはヒツジ毛をちゃんと利用することができなかった。モンゴルのヒツジ毛は、毛織物には向かないのだ。それで、私たちは研究して、実験すると、

絨毯製品に最適だった。そこで、絨毯工場を建設したよ。1960年代には手で作っていたのだがね。私が大工だったころ、工場には、手で絨毯を作る唯一の作業所があった。手製の時代には100㎡の絨毯を作っていたが、90年には200万㎡の絨毯を製造するようになった。200万㎡というのはすごい増加だろう？毛織物だって以前は作られていなかった。私たちは毛織物工場を建ててね。以前、羊毛布をほんの少し作ってはいた。初めて産業コンビナートが建設されると同時に、羊毛布を本格的に作るようになった。最終的に、60年代に私たちは毛織物工場をもつようになった。90年代には、100万㎡以上の毛織物を作っていた。ニット製品は、以前、まったく作られていなかったが、60年に、13万7000枚のニット製品が作られていた。それが90年には40万枚作られるようになった。これも、すごい増加だろう？

今では、私たちはいつも外国製のコートを着ているだろう？日本製のコートがモンゴルに輸入されているかどうか知らないがね。韓国製の、ドイツ製の、いろいろなコートが入ってくるようになった。モンゴル服というのは、都市生活にはあまり合わないのだよ。モンゴル服は遊牧生活をしている人たちの服であって、都市の人間の着る服じゃないのだよ。都市は暑いから、毛皮を内張りしたモンゴル服を着ては、仕事ができないのだ。そんなわけで、コートを作るようになった。60年には1万6000着のコートを作っていたが、90年には6万4000着を作るようになった。スーツがあるだろう？モンゴル人はそれを着るようになった。60年には3万2000着のスーツを作っていたのが、90年には、14万着を作るようになった。今ではこういうのは全部なくなった。60年に、29万㎡の天幕用フェルトを作っていたが、90年には70万㎡になった。このように、増加していたのだ。モンゴルでは、肉コンビナートを建てて肉の缶詰を作るようになった。なめし革の靴というのがある。今では、私たちはいつも外国製品を使っているがね。これは、モンゴルの気候条件にはそぐわないのだ。90年に私たちは480万足のなめし革の靴を作っていた。今では、その工場は貸し店舗とか、バーになってしまっているがね。どうだい？

K：ここに書いてあるのをコピーしていいですか？

D：こんなに汚く書いたものが君たちに要るのかい？

K：必要です。

D：こんなふうに、成長したのだ。この数字を君にどういう目的で言っているのかと言えば、どんなにたくさんの工場ができたかを示そうと思ってだよ。建てた工場の名前をいちいち挙げるより、時間を節約してこういう経済的指標を言ったままで、モンゴルの産業の発展を見せたかったのだよ。この発展の時代に、私はここで働く好機に遭遇したわけだよ。

K：今数字で示して下さったことを、地図で示していただけますか？

D：ああ、そうしよう。

11 エネルギー部門と重工業の発展

K：あなたは大臣に就任して以降、最初にどんな工場を建てたのですか？

D：とてもたくさんあるよ。私が大臣だったころ、皮革、毛、食料品工場は既に建てられていた。数えるか？

K：当初、どんな援助で、ロシア人とか、チェコ人とかが来て、どんな工場が建てられましたか？

D：じゃあ、重工業から言うとだね、私が大臣だったころ、ウランバートルには、たった1つの発電所があった。ウランバートルも大きくなっていったね。発電所が何を供給していたかと言えば、第1に電力だった。工場という場所は、火力発電や水力発電で、ウランバートルに暖房を供給していた。ウランバートルは大きくなるにつれ、たった1つの発電所だけでは、まかなえなくなった。電力をとっても消費してね。私が大臣だったころ、新聞に通達を出して、ウランバートルの各区域の世帯を順番に停電していた。若い大臣といっても、やはり面子というものがあるだろう？若い大臣が大きな仕事をしている時に、真っ暗になるほど危険なものではなかった。そもそも、党中央委員会の総大会というのは、とても重要な会議なのだ。そのときに停電になったり、国家大会議を開いているときに停電になったり、外国から客人が来てレセプションをおこなっているときに停電になるのは、とてもたいへんな問題だよ。そうだろう？大臣が直接責任をもったのだから。明らかな事例を挙げるとだね。中国の代表団長として周恩来が来たことがあった。それで、大規模なレセプションをおこなった。私は大臣になって、妻を娶って、私の第1子が生まれようとしていたころだ。妻はそのレセプションに行かなくてはならなかったが、身重だったから、行くことができなかった。中国大使館でおこなわれたそのレセプションに、私も行ったのだがね。Yu.ツェデンバル書記長といったモンゴルの大物たちが、みな出席したよ。大臣たちも集まった。それで、最初はうまく始まった。最初に周恩来が挨拶をした。乾杯をした。次に、Yu.ツェデンバル書記長が挨拶をした。かなりいい具合に進んでいた。私はと言えば、会議やレセプションに参加する時、そこで何がおこなわれているかはまったく関心がない。電気は大丈夫だろうかとばかり考えている。中国の外務大臣に陳毅という人がいたのだがね。その陳毅が挨拶を述べていると、停電してしまった。もうどうすることもできない。こういうようなことが、よく起こっていた時期だった。

しかし、90年にはもう停電しなくなっていたよ。冬に家の窓の防寒措置をするなんてことはなくなった。90年代以降に、暖房が効かなくなったのだ。私と同じアパートの住人たちは、「あなたが大臣だったころ、私たちは窓に目張りしなかったよ。もう今は寒くて、凍えてしまうよ」と言うのだ。この電気を誰が供給するようになったか？ウランバートルの第1、第3、第4発電所は、ソ連が建てた。第2発電所の建設のとき

には、中国が援助した。ダルハン市やエルデネト市では、ソ連が発電所を建ててくれた。最初の高圧電流線を、モンゴルに取りつけた。このように、電気部門が進んだ。

鉱業部門では、ナライハ市の鉱山とって、ウランバートルから遠くない45kmのところにある鉱山の拡大作業をソ連がした。また、シャリーン・ゴルの炭鉱開発にも、ソ連が援助した。ここで、重工業の部門では、ソ連の援助が中心を占めていた。これはどうしてかと言うと、資本金がとてかかるものだからね。こういうものを建てるためには、借款をする。こういうふうには、鉱物や、燃料、エネルギー問題に関して、モンゴルの国はたいへんひどい状態にあったのだが、短期間でこれを脱したのだよ。

K：第1発電所と第2発電所は、いつ建てたのですか？

D：第1発電所は、1934年に産業コンビナートが建設されるときに初めて建てられた。それは1500キロワットのものだった。1500キロワットなんてたかがしれたものだよ。60年代に第2発電所を中国人たちが建てたのだが、それは24メガワットの発電所だった。これだって、そんなに巨大な発電所ではないよ。第3発電所は70年代に、第4発電所は80年代に始動した。産業を発展させると言っても、そもそも単に産業ではなく、それ以外にモンゴルの国民生活の需要を満たすうえでも、エネルギーはたいへん重要な役割を担っている。例えば、家にどんなに素晴らしい冷蔵庫があっても、肉プロセッサがあっても、電気がなければ、どうするのだ？このように、国民生活から産業発展まで、エネルギーは不可避的に必要になる。この問題をモンゴル国は短期間に首尾よく解決することができたのだ。この問題を、このように解決して、さらにエルデネト銅山を利用する問題が出てきた。この問題も、私たちはうまく解決した。1978年にエルデネト工場が稼動し始めた。君は、エルデネトに行ったことがあるかい？

K：エルデネト市の銅工場には入りませんでした、エルデネト市になら行ったことがあります。

D：君、その工場に入ってみなさい。ほんとに大きな工場を建てて、1978年に稼動させたのだからね。鉱物部門で、私たちは長年、成果のある働き方をしたよ。モンゴルの各県で炭鉱をもつようになった。鉱床のない場所は別だがね。炭鉱のある県であればどこでも石炭が採掘されるようになった。どの県にもディーゼル発電所ができた。君は、地方にいつも行くだろう？今は日本の援助で郡の発電所を再建しているよ。90年以前は、どの県、どの郡にも、ちゃんと発電所があって、停電になることはなかった。そのころは、電気というものは、単に生活の1問題というわけではなく、国家の大問題だったからね。夜、本を読もうとすれば、どうするかね？そのつどランプの光で読むか？私はランプの光で本を読んでいたがね。君は、ランプを知っているかい？今の若者たちがランプをもって、勉強していると考えてごらんよ。私たちは発電所を郡ごとに建ててやった。県の需要を満たしたし、郡の需要もすべて満たしてやったのだ。

K：地方に発電所をつくったのも、あなたの仕事ですか？

D：そうだ。私たちの仕事だ。産業大臣をしていたころにした仕事だよ。モンゴルに初めて高圧電流線を配線した。最終的に、私は党中央委員会の産業担当の書記長となった。私はモンゴルの産業に関連するあらゆる問題に責任をもっていた。そのころの私たちの党は、今のように議席のために争うことはない。人民の生活がどんな状態かによって、その仕事を評価する。君はこれを区別して理解する必要がある。今のこの新しい党というのは、そもそも議席のためだそうだ。そんなことって、どういうことだ？政府の権利のためということだよ。政府の権利のためというのはね、どういうことかって言えば、これは議席のためということだよ。そうだろ？私は本当のことを言っているだけだ。

私は3年前に知り合いの大臣の1人に会った。大臣室も広いものだ。中には、シンガポール製か、日本製の家具が備えつけてある。大臣はポケットから携帯を取り出して話をしている。車も外国車だ。日本製なのか、ドイツ製なのか、韓国製なのかはわからんがね。西の車だった。私はその大臣に「君たちも、すごいじゃないか。執務室も広いし、家具は外国製だし。車も西側のものになったし。だけど、仕事のほうは駄目になったな。君たちは、こんな洒落た車に乗って、こんな洒落た部屋に座って、人民の前を歩くのが恥ずかしくはないのかね？」と言った。私たちは悪い車に乗って、任務をしっかりとこなしていたよ。私たちの欠点だったかもしれないがね。いい車にも乗らず、いい部屋にも居ず、いい家具も買わなかったというのはね。だけど、私たちは人民のために全力投球していたのだよ。私たちはロシア製の車に乗っていた。私たちは外国の車には乗らなかった。私たちは、それを知らなかったからじゃない。私たちだって「メルセデス・ベンツ」や「トヨタ」という良い車があるのを知っている。私たちはそれを買って贅沢をするよりも、その資本を人民のために使わなければならないといつも考えていた。今は、それなのに、どうなっているのだ？公的な機関の長と言え、トヨタであっちこっち乗り回している。人民の生活がこんなふうだっているのに、贅沢をする必要はないのだ。そうだろ？私はその大臣に、「君の車に乗って、執務室に入れば、すごいものだ。君たちが人民の前を歩くなると、恥ずかしくなるってものだ。こんな大臣など用なしだ」と言った。私たちの時代、大臣の言葉は、とても力をもっていた。大臣が決めさえすれば、それを実行していた。今は、大臣の言葉と言っても誰も相手にしないよ。「ほざけ」とばかりに通り返すのだ。そうだろ？本当のことを言うと、こういうことになるのだよ。

K：まあ、そうでしょうねえ。

12 繊維工業の発展

D：さあ、重工業については、そういう感じだ。軽工業は、どんなだったかと言うと、

毛と皮革を主軸にしなくてはならなかった。この2つを完全加工して、最終製品を作ることを目指していた。私たちは、1年に30万枚のヤギ革の服を輸出するようになった。これは60年代のことだ。それは何か？これは大きな成果だった。350万ないし400万近くの靴を生産して、人民の需要を満たしていた。それだけでなく、靴工場で生産した靴を、私たちは輸出していた。チェコと言え、靴の国だろう？そこは、私たちのところから靴を買っていた。

K：あなたが大臣になる前に、そういう工場はあったのですか？

D：なかった。私が大臣になったころ、コンビナートのいくつかの古い工場以外、工場はまったくなかった。私たちは、ヒツジの革を加工してクロムなめしヒツジ革、ヤギ革を加工して同じくクロムなめしヤギ革を作る2つの工場を作った。君は、クロムなめしヒツジ革とか、クロムなめしヤギ革とかを知っていると思うが。なめし革工場といって、年間40万枚の牛革を加工する、そういう工場を設立した。また織物工場を設立した。いくつかの洗毛工場を建てた。

K：どこに建てたのですか？みんな、同じ場所ですか？

D：違うよ。建てた場所を言ってあげよう。まず、ウランバートルに建てたのは皮革を加工する工場だよ。牛革、ヤギ革を加工する工場だ。全部でウランバートルに20近く建てたよ。

K：ウランバートルのどのあたりですか？

D：これは産業コンビナートにあるものだよ。身体さえよければ、ここにはこんな工場があった、今は日本と中国のバーがあると聞いて、君たちに教えてやりたいよ。これは韓国のバーになったとか言えるし。ここでは、昔、靴の製造をしていた、今は中国のバーになっているとか言ってやるのだがね。この通産省の大臣にCh.ガンゾリクという若者がいる。知り合ってね。私をそのうちに招待することになっている。いい若者だよ。私は彼に、「この工場群を報道して、宣伝をしよう！」と言ったのだ。私たちがいかに青春時代を、全身全霊を賭けて建設したかをね。「今はどうなってしまっているのかを君たちに見せよう！」と彼に言ったのだ。大臣は「そうしよう！」と言うのだよ。今では、私たちの時代に建てた工場がすべてなくなった。私は最近身体が悪くなって歩くことができないでいる。その工場の建物はすべて貸し店舗になってしまった。現在、軽工業で稼働している工場と言え、ウランバートルの絨毯工場だけだよ。私たちは絨毯工場を3つ建てたのだよ。君、考えてもごらんよ。60年代に私が大臣になったころは、約1000㎡の絨毯を製造していただけだった。そして私たちは、ウランバートルの絨毯工場、チョイバルサン絨毯工場、エルデネト絨毯工場を建てた。この3ヶ所の絨毯工場を建てた。洗毛工場を建てた。それ以前に私たちが毛をどう処理していたかって言え、家畜の毛は年ごとに用意するのだよ。そうだろう？その幾分かは、ほとんど洗わずに、あるいは糞などを取る「冷洗」と呼ばれる洗いをし

て、ソ連に輸出するのが常だった。こういう「冷洗」のほかには洗毛工場もなかった。最終的に、私たちは洗毛用工場を4つ建てた。ウランバートルの洗毛工場を改装した。チョイバルサン、バヤンウルギーに新しく建てた。モンゴル国では、年間に2万トンの毛を生産しているのだがね。すべてを洗って、清潔にして、国内用の需要に向けて絨毯を作った。余剰が出れば、外国に輸出していた。モンゴル人は、ニット製品はすべて外国から買っていたのだがね。ニット製品は知っているだろう？織物とは別だよ。ロシア語でトリコタージと言う。また各県には小規模ながら縫製工場がたくさんあった。どの県にもそういう縫製工場があった。今では全部なくなってしまった。

K：全部なくなってしまった？

D：全部パーになったよ。そこではね、靴や、民族服や、コートや、洋服を作る。地方製のものは、ウランバートルの人にはちょっと選り好みされて人気はなかったようにけどね。だが、地方にはとても必要だ。具体的に言えば、地方には「白底の靴」と呼ばれる靴がたくさん製造されていた。今の子どもたちはもう知らないだろうがね。この靴は、身体にはとても良い靴だったのだ。

今の若者たちはイギリス製や、アメリカ製や、ドイツ製のゴム底の靴を買ってきて履いている。今の20代の若者たちが50に近づいてくれば、腎臓病になる。ここの気候条件はそんなのだよ。ここは、そんな湿気を帯びた靴を履いてはいけない場所だ。このことを若者は判っていない。中国製の黒いサンダルを一時履いていたが、次は、西洋製のゴム底の冷たい靴を履くようになった。ゴム底の靴というのはね、とてもひんやりしていて、人間の身体には悪い代物だ。ここの、今の若者たちは、そういう靴がいかしていると思うのだろうがね。ひょいとひっかけて動き回っている。若いときはいいさ。けれど、そんな靴を履いていけば、40代、50代になってくると、腎臓がだめになってくるのだよ。腎臓以外にも、肝臓の病気にかかる。これは私たちの生活で試験済みのことだ。

私たちは40万足の靴を作っていた。「白底の靴」というのは、半加工したウシの革で作る、柔らかくて、ウマに乗って移動するのにとても適していて、足の部分が温かい靴なのだ。それには唯一の欠点があったがね。水に濡れると、ちょっと伸びるのだよ。だから、ウランバートルの人は好んで履かなかった。乾燥したところで履けば問題ないがね。モンゴルの土地というのは、とても乾燥しているのだよ。それに石も多い。そんな窮屈なゴム底の靴でそんな場所を歩けば、簡単に使い物にならなくなる。「白底の靴」は、すすい歩き続けることができるのだよ。

ある年、アメリカから、ある旅行者が「私は世界でこんな靴をずっと探していたけれども、見つからなかったのだ！」と言って、大量に「白底の靴」を購入して帰ったそうだ。妻や兄弟たちにも買ったと言うのだ。昔、アメリカでもそういう靴を作っていたのだろうな。それで、なぜか結局作るのをやめたのだそうだ。それで、その人は

手に入らなくなったのだろうか？物の良し悪しが判る人たちというのはね、そういうものなのだ。

こんなふうにして、軽工業では、すべての皮革や毛を加工して、国内用の需要を満たして、余剰分を輸出していた。とくに70年代から80年代には、かなり輸出していたよ。

K：ロシアにも輸出していたのですか？

D：ロシアだけじゃなく、ヨーロッパの社会主義諸国であるチェコやドイツやブルガリア、ルーマニア、ハンガリーすべてに輸出していたよ。さあ、皮革の問題はこんなふうに解決してね。

次は、毛の問題がある。私たちは110万mの織物を作って、国内用に出荷していた。私たちのところでは民族服を着るだろう？民族服は、毛織物で作ると暖かくて、雨が降っても、内側に染み込まないのだよ。私たちは毛織物を、国内用の需要に応えるだけの量を作るようになった。これは、細毛を主成分として使う。細毛のヒツジは私たちのところにいたしね。太毛は2万トン生産していた。それは洗毛してから絨毯を作って、国内需要を満たして、輸出していたことについては話したがね。私たちは200万m²の絨毯を作って国内外に出荷していた。これは、どこへでも出荷していた。日本にだって出荷していたよ。

13 食品工業の発展

食料部門の状況はどうだったか？君の書いた記事に書いてあったらう？モンゴルは自分自身で原料を加工して、最終的な製品までを作るようになる必要があるという考えだ。私は君と同じ考えだよ。家畜は単に世話をするんじゃなくて、単に肉を食べるためにじゃなくて、家畜から取れるものはすべて利用していく必要がある。私たちの党や政府の方針は、まさにこの路線でやってきたのだよ。家畜からは、肉、革、毛、乳が出る。ウランバートルには大きな肉コンビナートがドイツの援助で建てられた。チョイバルサン市に肉コンビナートがブルガリアの援助で建てられた。ダルハン市では、肉コンビナートがハンガリーの援助で建てられた。それから、いくつかの県で小さな肉コンビナートが建てられた。昔は、家畜のかなりの部分を生きたまま出荷していたが、すべて加工した肉にして出荷するようになった。モンゴルに初めて缶詰工場が建った。肉の缶詰を作るようになった。今では作られなくなったと思うがね。年間に2000万個の缶詰を作って、全ヨーロッパに出荷していた。

私たちのところの肉の缶詰というのはだんぜん違うのだ。君の書いた記事にもあるがね。モンゴルの肉の素晴らしさを宣伝すればだね、基本的に野生動物の肉と同じなのだよ。人間の身体にとっても良い肉なのだ。君はヨーロッパとか、あっちこっちよく

行っているだろう？向こうの家畜の肉というのはね、ゴムみたいなものだよ。そうだろう？ぜんぜん味と匂いというものが無い。外見は良いし、小奇麗で清潔な包みに入っているがね。私たちのところの家畜の肉はまったく味が違って、質が高いのだ。これについて、私たちの首相と外国の大使とのあいだにあったおもしろい話がある。この首相にJ.サンボーという人がいたのだがね。とても頭のきれいな、すごい老人がいたのだよ。外国の大使たちは首相に信任状を渡していたのだがね。モンゴルのJ.サンボー氏は、彼自身、牧畜業の立派な専門家だからね。この方面で何冊も本を書いたし。J.サンボー氏はモンゴルの家畜の肉は良いという話をしたのだな。すると彼と会った大使が、「閣下、ちょっとおうかがいしたいのですが。なぜ、あなたはモンゴルの家畜の肉は良いとおっしゃるのですか？ヨーロッパのものと違いはないでしょう？なぜそんなことを言うのですか？説明してください」と言った。するとJ.サンボー氏は「ヨーロッパの家畜は与えられたものを食べる。モンゴルの家畜は自分の好きなものを食べる。だから、その肉はまったく違うものなのだ」と答えた。それはまったく真実だよ。

君は、内モンゴルでは定住化政策に移って、家畜と人間が一ヶ所に集中して、たいへんな状況になっていることについて書いているがね。あそこの家畜は、草原を歩くことを止めてしまい、自分で戻ってきて、飼料を用意してある柵の中に走ってくるようになった、と書いてあったな。家畜が草原を移動すれば、安上がりに飼育できる。私たちは家畜を生きたまま輸出するのをやめて、3つの大きな肉コンビナートを建てて、それだけじゃなく、缶詰を作るようになった。

私が大蔵大臣だったころ、日本に馬肉を輸出する話をして、実現しそうなところで、あえなく頓挫した。その後20年たってやっと今になって、日本に馬肉を輸出し始めているのだ。物事というのは本当に奇妙なものだよ。人間というのは皆同じように考えてはくれないのだから。先導力がなければ、どんな仕事も頓挫するものだ。私の知り合いに林という日本人がいたのだけどね。その人はもう亡くなった。とても良い人だった。とても年を取った人だった。その人がモンゴルに来てね。私は彼に馬肉の取引を持ちかけた。「モンゴルにはウマがたくさんいる。それを日本に宣伝してください。私がウマを用意しますから。肉コンビナートを活用しましょう」とね。モンゴルの肉コンビナートは季節的にしか稼働していない。ちょうど今ごろなら動いていると思うがね。7月から12月まで動いていた。モンゴルの家畜は追い立てられて連れて来られるわけだから、季節的に動いていたのだ。冬に家畜は連れて来られないということだよ。けれどもウマなら冬にも連れて来ることができる。ウマならちょうど冬に肥えている。だから、肉コンビナートが停止する時期から、ウマをほふって日本に出荷する案を出したのだ。林氏はとても良い人だった。私は日本に行って、食料品の輸入規定を知った。日本はかなり高い基準を課すところだね。衛生面でとても厳しかった。そこで、

私は林氏にさらに希望を出した。「馬肉の脂を入れる容器と、容器に入れるための機械と、ビニール袋などを輸出してください」と頼んだ。2人でこう合意して、かなり長いあいだ話し合った。

話し合った後、私は通産省の者たちに命じて、トゥブ県で1200頭の若い良馬を用意させた。老いたウマの肉はとても硬いからね。3歳馬や4歳馬なら、かなりおいしくて柔らかい肉をしているのだ。ウランバートル市はトゥブ県内にあるからね。日本は食料品の輸入に、とても厳しくチェックをするからね。そうだろう？農林水産省がとても厳しいチェックをするのだな。林氏は春に来てね。それで、彼に「秋にもう1度来てください」と頼んだのだよ。あれは何年だったかなあ。77年だったように記憶しているがね。林氏は、「秋に私は農林水産省の専門官と一緒に来ます。その人が、ウマをどのように、どんな条件で屠るかを見ます。現場を見てから、許可を与えます」と言って帰った。今、日本に農林水産省はあるのかね？こんなふうに私たちはウマの用意をして、工場をいつでも稼働できる状態にして、ずっと待っていた。

そして秋に彼はやってきた。農林水産省から2人の人間を連れてきたよ。私が担当して会った。モンゴルの肉コンビナートもよくできたものだよ。ウランバートルの肉コンビナートは、年間に120万頭のヒツジとヤギ、12万頭のウシをさばく能力があるのだ。この力は大きいよ。ときには、この工場で故障がおきたり、調子が悪かったりして、血や血塊が出ることも起きていたがね。そもそも、肉工場というものがたいへんなのだ。私たちはよく洗浄して、さらに清潔にしていた。だいたい、きれいな工場だよ。ドイツ製の機械が稼働する工場だ。軽・食品産業省の副大臣は、日本から来た人たちを連れて、工場を見せて回った。その後、肉コンビナートの製造品のところに寄った。どんな製品を作っているかを見せた。私は副大臣からあとで、「どうなった？」と聞いた。「とてもよかった。たいへん満足だ！」と言う。私は彼らが帰国する前に、招待して会った。彼らは1週間して帰った。人間は人間だろう？日本人でも同じだし、ロシア人、モンゴル人でも同じだ。人は人だ。付き合いというものから、たいてい事はなるのだよ。私は林氏に好感をもった。「大臣閣下、私は正直に言います。私はモンゴルに来るにあたって、どんなふうを考えていたかと言えば、私は基本的にモンゴルで肉を買い付けないだろうと思っていました。なぜなら、モンゴル人たちは家畜をどのように屠るかという、ウシをたたいて横倒しにし、ヒツジは仰向けにしてから、みぞおちの部分を切り開きます。そんな野蛮な方法で屠るモンゴルから、日本がどうして肉を買うのでしょうか？私は基本的にモンゴルから肉を買うことはないだろうと思ってやって来ました。あなたがたのところの肉コンビナートを見ると、私たちのところにあるような肉コンビナートです。ヨーロッパ式の高級な設備があります。すばらしい肉コンビナートです。ここから肉を買うのに、私たちには何の躊躇もありません。あなたがたの同僚の人たちは、私たちを連れてウマを放牧しているところ

を見せてくれました。200頭ずつ入れた6ヶ所の1200頭を見ました。ウマは本当に素晴らしく太っていて、若いし、工場もこんなに素晴らしい。私たちには何の躊躇もありません」と言う。君たちはヒツジを屠っているのを見たことがあるだろう？その人はそういう理解でやってきたのだよ。すると林氏が、「私はあなたに1つアドバイスをしたいのですが、よろしいですか？」と言う。「かまいませんよ」と応えた。「モンゴルでは肉に、＜ウランパートル肉コンビナート＞と英語で書いて、日本の何々という場所と住所を書いてください。英語のラベルを作るということですよ。中に入れるものはわかりましたから。とにかく、この英語のラベルをきれいに美しく作って貼ってください。そうすれば、あなたのところの肉を日本は買うよ。ラベルを改良して貼っていれば、中に入っている肉については申し分ありません」と言う。こんなふうにアドバイスしてくれたよ。モンゴルで作ったラベルがちょっと見栄えしなかったのだな。私たちのところでは、英語を知らないものだから、ちょっと無骨なものを作ったのだろうと思う。こうして、私も喜んだし、林氏も喜んでた。

当時、外国貿易の条約は軽・食料品産業省ではなく、国際通産省がおこなっていた。私も条約がどうなっているかなあと内心想っていて、様子をうかがっていた。林氏は、ある日やって来た。気分がまるですぐれないようで、顔色も悪い。年も取っている人だがね。「大臣閣下、私は明後日帰ります！」と言う。「例の件はどうになりましたか？」と私は聞いた。「あなたがたの国際通産省は、まったく用なしです。すごく高い値をつけてきます。モンゴルの馬肉1トンを1400米ドルという、国際的にありえない高値を言っています。私はモンゴルの国際通産省の大臣と会いました。彼に頼んでみました。どうしようもありませんでした」と言う。1200頭の肉と言うのは、かなりの量の肉だよ。100トン以上になる。そのままだったら、約200トンになる。彼は日本でかなり宣伝をしたのだろうと思う。「モンゴルから馬肉がくる」と言って、宣伝をしていたのだろうな。アメリカから馬肉の腸や内臓を自分のところにくれという申し出も彼のところに来ていた、と言うから。何重にも大きな騒ぎになってね。モンゴルの馬肉というのは珍味だよ。健康にもとても良いし。とくに、血圧を上げたり、血管を太くしたりするのにとてもいい。馬肉は金持ちだけが食べるものだった。普通の庶民には手に入らないのだよ。だから、彼は買い付けに奔走したのだろうな。それで、林氏は「モンゴルの国際通産省は、まったくもって用なしです。利益を得ようというのは誰しも考えることです。日本も考えるし、モンゴルも、ロシアも、ドイツも考えます。誰しも利益を考えます。モンゴルでは、1トンを1400米ドルで売ると言うのです。それで、私は企業秘密をもらいました。私はウランウデに行ったことがあり、そこでモンゴルのウマを屠って私に売ることになっていました。私はそのウランウデから、ロシアから買い付ける契約書を見せました。もともと見せるようなものじゃありませんがね。国際的に考えられない、慣例にないようなことを話すので、腹が立って、企

業秘密をもらして、ウランウデのロシアと締結した契約書を見せました。そこには950米ドルで買うと示してありました。ところが、モンゴルでは1400米ドルです。ドルというのは、とんでもなく高いものです。モンゴルの人たちはとても注目しています。とくに軽・食料品産業省がとても注目しています。私たちは初めてこういう取引をしようとしています。日本に肉を輸出するという事は、これから何年にもわたることになると見積もって、あなたがたの馬肉を1100米ドルで買おうというわけです」と話しました。それなのに、あなたがたのところはまったく取り合わないのです。私は万策つきました。もう帰ります。けれど、あなたにあげるつもりで用意した梱包容器の機械と、ダンボール、ビニール袋など、山のような物資がナホトカの先の税関のところまで来ていて、もう2ヶ月も待機しています。かなりの金を払い続けているのです」と言って、彼は帰っていった。とても気の毒なことになっていることが私にも判っていた。だからといって、どうにもなるものじゃない。最終的に、私は国際通産省と仲が悪くなって喧嘩して、事が終了した。昨年、バガハンガイの肉コンビナートから日本に馬肉を出荷し始めたとは私は新聞で読んで、「時代も変わったものだ」と思った。当時も、私は悪くはない考えをしていたと内心思っていたがね。20年前に出荷し始めていたら、これまでの期間にちゃんと道がついて、恒常的なものになっていたよ。こんな具合に、肉や、肉問題を決めていたよ。

じゃあ、小麦の工場はどうだったかという、モンゴルでは、80万トン以上の小麦を収穫して、20万トン以上の小麦粉を作っていたよ。小麦粉の余剰分は輸出していた。小麦粉を作って、小麦粉を輸出していた。今では、モンゴル中、中国製の小麦粉であふれている。そうだろう？こんなふうになってしまった。小麦粉工場は、ウランバートル、スフバートル、フブスグル、ボルガン、オラーンゴム、ハラホリン、バヤントゥメン、チョイバルサン、ヘンティーの、この8つの場所に建てて、この小麦の問題は片づけた。

K：今、ウランバートルで小麦粉工場は稼働しているのですか？

D：している。昔には及ばないがね。肝腎なことは、ウランバートルの小麦粉工場が、外国から、カザフスタンから小麦粉を買っていることだよ。これは何の必要があるというのだ？私たちはかつて80万トンの小麦を収穫していた。君、考えてもごらんよ。80万トンの小麦を収穫していた。去年は、やっと20万トンの小麦を収穫した。80万トン収穫して、自分たちの需要はすべて満たして、小麦粉と小麦は輸出に回していたのだよ。

K：私は20年前ウランバートルに留学していました。そのころは外国に輸出していましたよね。

D：こんな具合に小麦粉の問題を解決した。モンゴル人には、1つ奇妙な習慣がある。ビスケットや飴をよく消費するのだ。君が家庭を訪問すると、必ず容器に入れた飴を

差し出してくれるだろう？それはとても重要なことなのだ。昔、コンビナートを拡大した。新しいコンビナートを設立した。ダルハンに新しいコンビナートを設立した。これで、飴の問題が解決された。

モンゴル人はパンを食べる習慣がなかったが、パンを作るようになった。第1、第2、第3パン工場をウランバートルに作った。大きな工場だよ。どの県も自前のパン工場をもつようになった。ウランバートルには2つの工業地区があるのだ。産業コンビナート区域と、トルゴイト区域だ。これは、さっき話した発電所と関係がある。食品工場はたいていトルゴイト区域にある。そこには、肉コンビナート、小麦粉工場、飴とケーキ工場がある。皮革や毛の工場は産業コンビナートの区域内にある。飴とビスケットなどの外国から買っていた品物を自分たちで作るようになった。

K：ビスケットも作っていたのですか？

D：もちろんだ。今では、ウランバートルの市場に入ると、いつも外国製のビスケットばかりあるがね。

K：今、モンゴルでビスケットはなくなったのですか？

D：あることはあるだろうね。激減しているよ。こういうように、私たちは人民の必需品である民族服、靴、洋服、食料品すべての需要を満たして、主な食料品では、砂糖だけは外国からいつも買っていた。酒やジュース類では、ビールや蒸留酒、ジュースのすべてのものを自分たちで作っていた。今、ウランバートルには外国産の酒があふれている。しかし、このように、私が大臣だった60年、70年、80年代の30年間は、人民の必需品すべてを満たして、余剰を輸出していた。それなのに残念なことだ。君たちも見てのとおり、今日では、この10年のあいだに、これらすべてのものがなくなって、せっかく建てたものをだめにしてしまった。

14 私有化の失策

ここで、私はあることをちゃんと言おうと思っているのだ。近年、ここの工場群が閉鎖した理由について、「物知り」（民主派連合系の政治家をさす揶揄的表現）たちが説明しようと努力している。「物知り」というのを君は知っているかい？モンゴルには「物知り」があふれ返っているだろう？君は「物知り」たちの知り合いか？「物知り」がここにはけっこういるのだ。

彼らは、「ああだ、こうだ、こんなあんなの社会だ」と言って回る。歴史をととても歪曲する。君は歴史を知っているか？歴史を知らない人間は歴史を歪曲するのだよ。彼らはここには牧畜の原材料を加工する工場、とくに、食品工場がストップしたことに対して誤まった説明を与えている。「私たちのところの工場は遅れている。ソ連やチェコやドイツが建ててくれた工場はみな時代遅れの技術だから、市場の要求に応えら

れないでいる。仕方なく手を上げて降参した」と皆話している。これは自分の起こしたまちがいを弁護しているのだ。自分たちのまちがいを正直に認める力がないことの証拠だ。私はこの説明は受け入れることができない。私たちの工場は近代的な工場だよ。君、考えてもみてくれ。イギリスには今だって18世紀に作られた大規模な工場群がそこにある。19世紀に作られたものだってそこにある。アメリカだって、日本だってそうだ。それをどうするかと言えば、建物を修繕し、技術を革新する。そうするのであって、今この私たちの「物知り」たちのように説明ばかりして座してなどいない。

だいたいこの「物知り」たちだって、私たちと同じように2本足で、靴を履くだろうと私は思う。「物知り」たちだからといって、足が4本あったり、私たちが作ってきた靴や服が合わなくなったりしてしまっているとは思わない。同じようなものであるはずだよ。彼らの説明は、国内外の人たちに誤った理解を生じさせている。これはたいへん悪いことだ。

私たちの工場に遅れた点があったかね？たしかにあった。悪い面があったかね？もちろんあった。けれどもそれは、どこにでも常に存在するものだ。それじゃあ、どうすればいいのか？この10年間で悪いところを改善して、良いところはそのまま残してもっと良くしなければならぬ。1つだけ例を言おう。400万足の靴を作っていた。この靴を履いたモンゴル人たちは健康に暮らしていた。今、その400万足の靴がなくなった。もし、その靴を改良していたなら、モンゴルの条件に合った素晴らしい靴ができたはずだ。しかし、その工場はいまや、中国のシャツを縫ってアメリカに輸出する工場になってしまった。あの靴工場をつぶしてしまったのだ。こんなふうにしては駄目だよ。私有財産化がモンゴルで実施された。

私有化の施行はもっともなことだろうと思うがね。靴工場の6階建ての素晴らしい建物がある。近代式的の設備がすえつけられていた。設備のいくつかは若干老朽化したという面はある。それを改良して、活用すればいい。私たちのこの頭のよい「物知り」たちは私有化のやり方をまちがっている。私なら「頭が悪い」ながらも、私有化をもっと別の方法で進めたよ。工場を買い取っているような人は、「とても豊かな人」だよ。それは、しかし、一種のペテンが横行しているのだ。国の銀行から巨額の金をインチキで引き出したのだ。たとえばI.ルハグワスレンが銀行主とするだろう？「じゃあ、君、私に20億トゥグルグ貸してくれ」とインチキをして受け取る。その金で工場を買い取って、その建物を中国人に貸して、借りの金を取り戻すのだ。私有化をする必要はある。国の背中にすべてがのしかかっている状態はたいへんだろうとは思う。けれど、私有化をするときに、こんなふうにしてはだめだ。

「さあ、この400万足の靴を作る工場だがね。もし、工場を君が買うのなら、生産を400万足以下に落としてはならない。モンゴルの人口は子どもの数と合わせて250万だ。だから、この数を落としてはならない。一番重要なのは、作っている靴を、おしゃれで

質の良いものにしろ、ということだ。こういう条件付きで君にあげよう！」となれば、私有化もうまくいくはずだよ。こういう条件も課さずに私有化すれば、軽工業をだめにして、君の書いたあの記事にあるように、牧民を市場から切り捨ててしまう。こんな状態で、牧民はどうなる？お金を払う者にだけ家畜の毛や皮革を売る以外にどうしようもない状態になる。もし昔どおりであれば、このシステムはもっと練られたものになるよ。私は、工場群の私有化には道理があると思う。けれど、賢く、道理をわきまえて私有化を進めなければならないと思うのだ。そうしていたら、君があの記事に書いているように、牧民大衆を市場と結びつけたままにしておくことができたのだ。

私たちのところには、農牧業関係の協同組合が259ヶ所あった。このすべてを一掃してしまっただよ。こんなふうにしてはだめだ。農牧業の協同組合を廃止するのはいい。だけど、家畜は本当に家畜を飼う人に与えて、農牧業の協同組合は牧民から皮革や毛を買い付ける。そのかわり、牧民のお茶や木綿や食料品といった需要を満たしてゆくべきだ。このつながりを断ち切ってしまうから、牧民は市場にたいして、どんな取っ掛かりもなくしているのだ。これで誰が得をしているのかね？1台のジープに乗って、後ろに10数台の車を引き連れて、赤や黄色の柄のついた巻きタバコを口にはさんで、懐には2、3本のナイフをしのばせた商人だけが得をしているのだ。こういう輩が来て「カシミヤを買う」と言ったら、牧民たちは売る以外にどうするのだ？彼らには、小麦粉や、米や、砂糖や、服や、布を買う必要がある。私はこのことを単に1つの誤りではなくて大きな政治経済のまちがいだ、と理解している。そうだろ？違うかい？私はまちがったことを言っているかね？まちがいなら、許してくれ。私はこの工場群を建てさせた人間として、これらがこんなふうにも崩壊してしまったことが残念でならない。本当に残念だ。そりゃあ欠点はあったかもしれない。だけど、その欠点を直してゆくことが必要なのだよ。

私たちモンゴル人には、素晴らしい慣習が1つある。父母の住んでいた天幕を、自分の育った家とって、どんなときもつぶしたり捨てたりはしないのだ。きれいに直して、屋根棒や壁に色を塗りなおして、壊れたら修理して、その悪い黄色いフェルトを新しい白いフェルトにして、中も外も白いカバーに交換して、父母のいくつかの長持ちを新しい長持ちにして、こういうようにして、父母の炉をそのままにして、ずっと燃えさせていくのだよ。今みたいに、壊して捨ててしまっただよ、よくなるなんていうことはない。これは炉を継承するモンゴルの伝統なのだ。今、遊牧文化、文明と言っているだろう？この遊牧の文化文明というのは、科学上の大きな理解の仕方だ。遊牧生活というのは遅れたものではない。自分の生活をそこにある環境に合わせて処していく知恵なのだ。それに合わせて、もっと改善するかわりに、せっかく作ったものを壊して捨てている。私たちのところの者は、イギリスやアメリカでちょっと勉強したのだな。しかし、彼ら外国人の生活というのは、まったく異なるものだよ。それで、

この10年の間につぶして捨ててしまった。ようやく、もう1度産業を復活させようとする課題が設定されるようになってきた。

15 産業復興のための施策

K：今、どうやって復活させるのでしょうか？

D：かなり思い切った策をいくつか取る必要がある。今みたいに無秩序ではいけない。モンゴルは、飛行機やトラクターや自動車を作らない。モンゴルで作るものは、皮革と毛だ。私たちの中心品目と言えば、これだよ。私は遅れていて、考え方がまちがっているかもしれない。モンゴル国は毛や皮革を輸出しないという決定を出せばいいのだよ。それでもし、これらのものを国境で輸出すれば、罰金だ。そうやって、牧民から国に毛や皮革を納めさせる。私たちはその見返りに彼らの面倒をみる。そうすれば、その工場群が稼働するための原料を得ることになるだろう？ところが、いまはどうなっている？モンゴルの毛を買っているのは、中国商人たちだけだよ。モンゴルの皮革も彼らだけが買っている。そして、工場は原料もなくストップしている。そうだろう？私はこれが理解できないでいるのだ。こんな政策って、どうなっているのだい？こんな状態で、どうやって工場を復活させることについて話すのだ？

今、私たちのところでは、あたらプログラムというものをするようになった。カシミヤを加工する工場のプログラム、皮革製品を加工する工場のプログラム、播種プログラム、とかなんとか、プログラムのないものがなくなった。いまや、妻と私2人の食べていくプログラムが欠けているくらいだろう。モンゴルにプログラムのないものはない。それでいて、そのプログラムが実現しているということはまったくない。そして、そのだめな理由を説明するのに、とても変な言い回しをするのだ。いや、私はその言い回しを思い出せないな。トグトルツォー（体系・構造）だったかな、ツォグツォルボル（全体構造）だったかな、そいつがまちがっているから実現できないと言うのだ。1つ、そういう言葉があるのだ。私たちの高官たちは始終言っている。それは、あらゆる無責任な、無秩序の状態を隠蔽する説明だよ。近年、資産を食いつぶすことがよく起こっているだろう？これは私有化の方法をまちがえたから生じていることだ。私有化の方法をまちがったことをずらして、トグトルツォー（体系・構造）がまちがっているからこうなったのだ、と言うようになった。こんなふうで大衆の頭を攪乱しているのだ。それから、マネージメントという言葉をよく用いるようになった。牧民にはその言葉が判らない。「あなたのところの毛は加工がまずかった」というかわりに「マネージメントが悪い」と言う。牧民はこんな言い方を理解しないよ。このように、いくつかの外国語やモンゴル語で戯れているのだ。これはとても危険なことだ。それだから、私たちの建てたものをすべて駄目にしてしまっているのだよ。

今日、モンゴル人民革命党は70年間、人びとを誤った生活に導いた、と言われている。誤った道で生活させてきたわけではない。私たちはモンゴル人民のためによかれと思って、すべてやった。仕事をしている人間はまちがいのやらかすものだ。けれども、今のこの若い人たち（民主同盟の陣営）のように、人民の暮らし方を誤らせてはいなかったよ。もちろん至らない点はあったかもしれない。私は最近、ある人の書いた論文を読んだ。秩序というものは、どの時代にもあるべきものだ。今、私たちのところは秩序がなくなった。秩序の上に民主化があるべきだ。本当のところ、民主主義というものは、それ自身が秩序なのだ。民主主義のない秩序は独裁になるという。私たちの民主化には秩序がないものだから、無政府主義になった。昔は、秩序はあって民主主義はなかったから独裁だった。昔は独裁で、今は無政府主義になってしまったのだ。基幹産業を興すのに、私たちのところに、今、何がある？500~600万頭のヒツジとヤギの皮革だけがある。3000トンのカシミヤだけがある。2万トンの羊毛がある。穀物を植えるなら、100万ヘクタールの土地がある。すべてのものは常にあるようにあるのだよ。一方で原料があるし、他方でかつての工場で働いていた技術者や労働者がちゃんといる。残念なのは、近年、その技術者や労働者たちが雑貨小売店を出したり、市場で商売したりして、いなくなってしまっていることだ。私が君に言っていた、約10万人の労働者たちは失業して路頭に迷った。抜け目のないものは、ブローカー的商売に走った。そうだったとしても、彼らはその仕事の修練を積んでいるから、もう1度集めれば働くことができる。

私たちは以前、労働者たちをどうやって育てていたのかという問題がある。牧民を労働者にするということは、大きな意識的改革がおこなわれていることなのだ。牧民を連れてきて、すぐに労働者になるのは単に最低限の労働賃金で決まるという問題ではない。昨日までウマに乗って気ままに自由に爽快な風のなかで駆け巡っていた人間が今日、急にある騒音の激しい変な匂いのする建物のなかに入ってきて、労働するというのはたいへんな問題だ。私たちのところには労働者階級は存在しなかったからね。労働者階級というのがまったく新しく生じたのだ。今では、労働者の子どもは労働者となり、そのまた子どもは労働者となる、いい時代が来ている。

労働者を養成するシステムがあった。細分化された専門技術のエンジニアや技術労働者は、社会主義諸国に留学させていた。また、細分化された専門の労働者に、修士号をそうした国々で取らせる。それと同時に、私たちのところでは30以上の技術専門学校が建てられていた。これは2年制の学校だった。ここで、子どもたちは8年生を卒業して入って、10年制学校の教育を受けて、2年間の専門的訓練を受けて、専門労働者となって卒業していた。これは70年代から80年代までにあった学校だ。今はこれらすべてが「バー」の技術専門学校になった。今や全てない。なかには、県にも技術専門学校があった。こういう学校で専門の人たちを養成していた。私たちの軽・食料

品産業部門で働く職工、靴職人、皮革職人、機械組立工、手仕上げ工などの各種の専門の人たちを養成していた。食品技術の専門学校では、パン職人、菓子職人、鮎職人など、その部門で働く人たちを養成していた。また、外国の技術専門学校では、細分化された専門の人を養成していた。このようにして、中心的な専門の労働者たちを技術専門学校で教育し、養成していた。

また、専門のない人も働かなければならないだろう？すべてを学校で養成しなければならぬということはなかった。そのような人たちに、工場の訓練を経験のある労働者が指導していた。そうした人たちは1ヶ月か、2ヶ月の講習会を受けて実習して労働者になる。このような道で養成した労働者階級は、10万人くらいになった。今、彼らの子どもたち、彼らの子どもの子どもたちは労働者となっている。私たちはこんな素晴らしい時代に至ったのだ。それなのに、彼らたちを路頭に迷わせてしまった。この停止した工場群を復活させることはできる。少しばかり金と時間は必要だがね。壊れた建物は修理する。バーの戸棚を取っ払って捨てて、そのかわりに基盤となる機械をすえつける。これは可能な問題だ。ただし、金は必要だ。

私の心を悩ませているのは、もっと別の事だ。失業して、壊れてしまったこのたぐさんの若者たちを、どうやって正すのか？これこそ最大の難問になっている。以前は、その、たぐさんのまともな労働者の若者たちがいた。この過去10年に10歳だった子どもたちは路頭に迷って今や20歳になった。彼らは何の専門もないし、教育も受けていない人間だ。それは誰だ？それは、強盗、殺人者、泥棒、といった最も危険な人間になる。本来なら、素晴らしい青春時代だよ。なのに、専門もなくなってしまった。工場なら、復活させることはできる。専門の労働者も養成できる。これをするには10年から15年かかる。私たちが最初に、建物がないときに建てて、どの労働者を国内で教育を受けさせ、どの労働者を国外にやり、どの労働者を教育し訓練するかを決めて、外国からは専門家を招いて、自分たちの年配の労働者の研修をおこなわせることができた。私が大臣になっていたころ、労働者階級は2万人ほどだったのが、80年代の後半には10万人以上になったのだ。みな専門の人たちだった。専門の人というのは、機械を技術でちゃんとこなせるし、労働の生産性も高いのだよ。こうやって、私たちは養成することができていたのだ。

この10年のあいだに、素晴らしい専門性をもった若者たちを髣髴させた。彼らを元に戻すには、10年、20年かかる。君たち、考えてもみてくれ。今、10歳の子どもが父母に追い出されて、路頭に迷って街路で生活をしている。この子どもたちはどんな教育を受けるようになるかね？何の教育もないまま、泥棒や強盗になる。彼らは大きくなって「私が子どもだったとき、誰が世話をしてくれた？誰も世話などしなかった」と言って社会に復讐するままになるよ。その人の生活が60年、70年と続くことを思えば、彼らの子どもたちにも悪影響を及ぼすことになるだろう？こういうように不幸な

世代は続いていく。だから、私の心を一番心配させているのは、このまちがった道に突っ込んだたくさんの方若者たちの問題なのだ。これらをもとどおり、私たちのいた時代のように、教育があって、しつけもあって、秩序があって、就職させてやるのに何年もかかる。これはもっとも危険な問題になっている。

90年に、モンゴルの人びとは、みな読み書きができ、読み書きのできない人はいなかった。今、どこもかしこも、そういう若い人が増えている。今、兵役に行った若者たちがお互いを撃ち合って殺しあっている。昨日の新聞にまたそういう記事が出たよ。彼らが殺し合うのも当然だよ。その子どもたちは18歳になって、兵役に行っているのだから。10年間は浮浪者生活をしていたのだから。彼はどんな文字だって知らないし、どんな教育もない人間なのだよ。そういう人間の手に軍隊で銃をもたせて、別の誰かを撃ち倒させているというわけなのだ。これは単に1つの問題ではない。これは大問題なのだよ。だから、このモンゴルを復活させるということは、かなり厳しい建て直しであり、相当の努力をして実現させる問題だ。単に1つのプログラムをつくって実現するという問題ではない。今や、モンゴルでは、そうしたプログラムとかいうものをかなりするのだ。そこには、大きな目次がつく。今、仕事をするために、例のトグトルトォー（構造）か、トヒロツトォー（整合性）か知らんが、ことをうまく調節しようとして、1つの大きなことになるんだ。今、私たちに話し合いがない日なんてなくなってしまった。私はそれを記録したことなんてないがね。

「ゴビ」コンビナートを建てるときに、多いときは60～70人の人が来て、この工場を建てたのだよ。稼働したあと、私たちは日本から2、3人の専門家を招いた。招くとき、私たちは単に招かなかった。本当の専門家を招いた。その人が来て、先生をしてもらう人をちゃんと決めていた。やってきて3ヶ月間働くという期間も決めていた。彼らはやってきて、決められた期間、決められた人たちを教育して帰った。こういうように、すべてのことは明らかでなければならないよ。今の話し合いでは、それこそ話し合わないテーマというものが無い。そのうち、このトゥッツや商品の問題で話し合いがなされることになると思うよ。日本やアメリカのバーがどのように建てられているのかを教えてくださいとくらいが、せいぜいまだ話し合われていないくらいだ。ウランバートルでは、毎日、チンギス・ホテルで、イフ・テンゲルで、と会議や話し合いがおこなわれ続けている。会議や話し合いをするのはいい。私たちモンゴルにはこんな諺がある。君たちなら、おおかた聞いたことがあると思うがね。

会議が増えれば仕事が悪くなっている証拠

ホーショールが増えれば肉が悪くなっている証拠

と言うのだよ。肉が悪くなってきたら、ホーショールを作って、さっさと調理してしまうのだ。これは至極、的を得た言葉だよ。今、私たちのところでは1日に何十回となく会議がおこなわれている。こんな調子だから、この会議と話し合いの問題は、よ

く検討してみなくちゃならない問題の1つだ。君がああ書いた記事に、内モンゴルと関連づけて、とても正しい問題を提起していたね。

私は今日、君に会ってとても嬉しいよ。これは私の話した事から、私たちにとって必要な考え方や急所を取り上げて仕事に用いてくれるなら、これぞ、君から私たちに与えている援助だよ。日本の人たちが世界の多くの国のなかで、モンゴルのこの厳しい時期に、真っ先に助けているのだよ。私たちは同じ大陸にいる。アジアの国という点で、親切にも助けてくれるのだと理解している。しかし、この援助を賢明に利用する必要があるよ。佐藤紀子という人が1つ記事を書いていたがね。その人は、日本の与えた援助がウランバートルに来るとなくなってしまって地方の人々に届かない、と言っている。だから、もらっている援助を何に使っているのかを、賢くしっかり考える必要があるのだよ。外国人を招くときだって、きちんと道理をもって対応する必要がある。私たちは、本当に必要な事柄に対して援助をもらう必要がある。その高度に発展した国々には、1つ難しい問題がある。彼らは、自分たちの秤で計っているのだよ。彼らは自分たちの秤で計って、こうあるべきだといった助言を与えていることが多い。私たちのあの「物知り」たちも、ちょうど彼らの真似をして、そうするのだと言って突っ走ってしまう。彼らの与えた助言には、私たちの生活に合わないものがたくさんあるのだ。だから、会議や話し合いはかなり合理的におこなう必要がある。

16 カシミヤ工場「ゴビ」の建設

L: 「ゴビ」コンビナートが稼動し始めたとき、あなたはこの問題の責任者でした。この工場を建てた経緯を話していただけませんか？

D: この面で、私は話そうと思っていた。私は、毛と食料問題を解決したとき話しただろう？60年～70年代に私たちが解決できなかった問題は1つあった。それは、ヤギのカシミヤとラクダの毛を加工する問題だったのだ。モンゴルのラクダは約80万頭に達していたのだよ。今は減少して20万頭になっていると思うが。ラクダの毛を私たちは加工できないでいたのだ。60年代の半ばに、私たちは1300トンのヤギのカシミヤを生産していた。私としては、私たちの省としては、党や政府の与えた課題を全部とはいわないまでも、実現していた。唯一実現されなかった、私の満足いかなかったことと言えば、ヤギのカシミヤとラクダの毛を加工する方法を見出せないでいたことだ。

私たちの国は経済相互援助機構の一員だった。君たちは知っていると思うがね。今、私たちのこの「物知り」たちは、「まったくくだらないものに加盟してモンゴル国は浪費していた」と批判している。私はそうではない、と考えている。例を1つ言おう。その経済相互援助機構のメンバーは8ヶ国だった。モンゴルが加入して9ヶ国になった。この後、ベトナムが加わって10ヶ国になったと思う。機構のメンバーである国々

の産業省大臣は、1年に1度集まって会議をしていた。重工業省、食料産業省の大臣たちが会議をしていた。私は2回ほど参加したことがある。私たち大臣たちは席に座って、とても話し合うのだよ。何年も経てば、親しくなる。親しくなければ、自分たちの問題をうまく話すことができないのだよ。親しい大臣たち同志が会えば、生活や状況の面で、種種雑多なことを話すのだよ。それで、私はその大臣たちとモンゴルのカシミヤを加工できるようにしたいのだ、相談してみたのだ。彼らは、モンゴルからカシミヤを購入して、さらにイギリスに売っていた。彼らの中継して、モンゴルのカシミヤは、主にイギリスやスイス方面に輸出していた。私は彼らから「このカシミヤをどうやって加工できるようになるだろうか?」と尋ねた。「君は私たちとこの面で話をしても何の足しにもならない。私たちはこの面で協力できない。私たちのところには、カシミヤを加工する工場が1つもないのだ。私たちはこの面で何の知識もない」と言う。すると、ブルガリアの大臣が女性だったのだがね。彼女は「あなたが本当にそんなふうに考えているなら、イタリアやスイスや日本やイギリス、この4国に見学に行きなさい。できれば4国とも打診しなさいよ。駄目でも2ヶ国に行って研究してみなさい」と助言してくれた。

その当時、そうした国に行くのは、時代的に難しかった。今では、モンゴルの大臣たちは、休暇を取ったりして好きな場所に行ってしまうがね。いい身分になったものだよ。日本にも行ってみたよ。7日間そこでパーづけになった。日本人は「しっかり働いた」と言っただけでパーに入るのだね。今は往来しやすくなっただろう? 当時は、行くのが本当に困難だったのだ。今この人たちは、ソ連が事を決めていたのでたいへんだったと説明している。ソ連はたしかに権限をもっていた。おおよそ、資本主義の外国に自主的に行くことはできなかった。けれども、問題の核心はここにはないのだよ。外国に行くときには外貨がとてめにかかるのだ。私たちには、外貨が少なかった。今では外国から来ている援助のどのくらいが外国への派遣費用になっているのかを私は知らんがね。私は最近、高官たちと会って、「君たちは、この外国に行くという問題をもうちょっとまともにしたまえ」と言った。今日、大臣が1人行って話をした。その次の日には、また別の大臣が行って、また同じようなことを話している。そんなのでは駄目だよ。これをもうちょっとまともにやる必要があるよ。当時、私たちは閉ざされていたから行かなかったわけじゃない。行くなら、人と明確なことを話す必要があるよ。工場を買うなら買う、と言って契約を結ばなくてはならない。ポケットに何も持たないで工場を買うと言ってどうするのだ? そうだろう? 本当に肝腎な問題はここにあるのだ。だから、私はどうやって行って研究するかという面で策を練っていたね。

私は長年、人民大会議のメンバー、党中央委員会のメンバーだった人間だ。党中央委員会の委員として6回、人民大会議の派遣員として8回選ばれた。当時、外国で会

議がたくさんおこなわれていた。そこに代表者が行かなくてはならない。それに、国際議員連盟の会議もおこなわれる。この会議に、現在でも私たちのところから代表者が参加している。それで、私は中央委員会に行き、責任者と会った。「私は党委員会の委員でしょう？それなら、私はどうしてこの共産党大会に行きたくないのですか？私をどこか資本主義国で開催される共産党大会に派遣してください」と言った。すると、「君はどこか大会に行くつもりかね？」と言う。「イタリアに行きたいです」と言った。そのとき、つまり1972年にイタリア共産党の第13回党大会がおこなわれようとしていたのだ。カシミヤの問題を私は1970年からとても力を入れて研究しはじめた。それで、中央委員会の書記長D.モロムジャムツ氏に「私をイタリア共産党の党大会に代表者として送り込んでください」と頼んだ。「君は党の仕事をする人間ではないだろう」と言う。「どんな党の仕事もする人ではないだろう」とね。私は「党中央委員会のメンバーとして長年選ばれているのですよ」と食い下がってね。

すると、Yu.ツェデンバル書記長が、その党大会へ派遣する代表団の1員としてではなく、代表団の長に抜擢してくれた。人をたくさん連れては行かないよ。1人を連れてイタリアの共産党大会に行った。そこで、大きな専売公社モノボリアが1つあるのだよ。その管轄下に大きな企業が1つある。「それを見てください」と、私の友人の大臣は助言していた。その当時、イタリアの共産党委員長はルイジ・ロンゴという人だった。高齢でね。書記長はベルリングエルという人だった。私は党大会に出席して、祝辞を述べて、Yu.ツェデンバル書記長の挨拶を伝えた。それから、ルイジ・ロンゴと会った。彼はたいへん有名な人物だよ。「私はあなたがたの大会に出席できて、とても嬉しいです。私の来た1つの主な目的は、工場見学の件です。私にこの件で助力をお願いします」と頼んだ。「私はこの件をよく知らない。私たちの書記長のベルリングエルと会いたまえ。私はベルリングエルにあなたの希望を伝えておこう」と言う。彼は高齢でね、それでも政治の主導権を握っていたが、産業の細かいところは知らなかったのだろうか。私はベルリングエル氏と会った。ベルリングエルは当時、若かった。彼に祝辞を述べた。そして、「素晴らしい大会だった」と言った。その後、私は主要目的を言った。「私はカシミヤ工場を見学したいのですが、あなたがたのところではカシミヤ工場がほかの国よりも発展しています！」と述べた。ベルリングエル氏は若かったが、産業面の事柄をよく知っていたのだろうと思う。「ああ、あなたはこの会議の時期にそういう問題を持ち出さないで下さい！相手は、共産党たちがスパイ行為をしていると騒ぎになる！まったくいけません！あなたが大臣だということを私は理解しています。それなら、あなたは大会が終わったあとに、ここに残ってください！そのころに私がお膳立てしてあげましょう！」と言う。そうして大会にずっと出席していた。その社会主義諸国と貿易するレスト・イタリという企業の社長が共産党員だった。その人と呼んでこさせて、「モンゴルから来た代表団長で、軽・食料工業省の大臣

であるP.ダムディンという人だ。この人は、議会在終了した後、工場を見学する。君、お膳立てを頼むよ！」とベルリングエル氏は言った。気の毒に、その企業は私たちに金がないのを知っていたのだろうか。イタリアにいるあいだの私の滞在費用を企業に出させると言う。それで私は会議に5日間出席して、2日間は工場を見学した。とても大きなコンビナートだった。それを見て、私はカシミヤの加工方法がどのようなものであるかを理解した。剛毛を取り分けるのが急所となる。その他の点は、基本的に繊維工場と同じであると見て取った。カシミヤの剛毛を選り分けることこそが肝要な点であることは明らかだった。それ以外は繊維工場と似たりよったりだった。この工場はとても印象に残った。

それからモンゴルに帰国して、私は金の算段で駆けずり回った。そんなふうには駆けずり回って、国連機関の援助で、1974年にカシミヤとラクダの毛の小さな試験工場を建てた。1台ずつの機械を置いてあるだけで、あとは何もない工場だった。私たちの同僚たちも、私をととても応援してくれた。最初は試験用実験室という名前だった。工場を建設すると言えば、国連機関は援助しないのだ。だから、試験用実験室という名前をつけたのだ。年間に50トンのカシミヤを加工していた。カシミヤでこんなにもいいものが作れるのだということが判明した。それで、1977年に私はもう1度、上層部にかかけあった。私は人民大会議の議員だった。議員は国際議員連盟の大会に行っていたのだよ。国際議員連盟の大会がオーストラリアでおこなわれようとしていた。「私はそこへ行ってみたくと思います。私は大会議の議員です。なぜ私が国際大会に行ってはいけないのですか？」と質問した。それで、オーストラリアに日本経由で行った。私は必要性を主張し続けて、議会に行く許可を取った。私はそのときに妻を連れて行った。妻に日本を見せようと思ったのだ。それは1977年だった。妻を連れていくどころか、大臣が日本に行くのさえ、たいへんな時代だよ。私はそのときに、Yu.ツェデンバル書記長のところに行った。「ツェデンバル書記長。私はオーストラリアの国際会議に行きます。日本経由で行きます。日本にも目的があって行きます。私は日本のカシミヤ工場を見学するのです。日本のカシミヤ工場は、私たちにとても重要な意義をもつ工場です。私たちはカシミヤを加工することができないのですから。私は日本に妻を連れて行きたいのですが」と言った。Yu.ツェデンバル書記長は人間的で、とても良い人だった。「もちろんだ。奥さんもぜひ連れて行きなさい」と言う。それで私は「私は国から一切の旅費を出させません。私は妻を私費で連れていきます。私の旅費は国から出させます！」とやった。それで出発した。

そもそも日本に妻を同伴していった最初の大臣は私だよ。東京入りして、大使館に妻を残して、その先のオーストラリアに行き、7泊した。そこでは1つの大きな肉コンビナートを見学した。オーストラリアは1億6千万頭のヒツジのいる国だよ。それに対してモンゴルは1千400万頭だよ。肉コンビナートがどんなふうかを見学した。

日本に駐在している大使に「私は帰国の際に、日本のカシミヤ工場を見学する。日本で、私はほかに何も見ない！」と言ってあった。それで、帰り道に大阪でカシミヤの3つ、4つの工場を見学した。こうやって、カシミヤを日本とイタリアで如何に加工しているかを見終えた。

それで、私の3番目の目的は、イギリスに行ってみ学することだった。イギリスに行く方法をずっと探していた。当時、イギリスと文化交流協定が結ばれて、医者や教師たちがイギリスに行っていた。それで、私はモンゴルの外務省に「私をその文化協定の枠でイギリスに行かせて欲しい」と言った。「あなたはどのようなつもりですか？文化協定の枠で工場の人を派遣するような規定はありませんよ！」と言う。「いや、まあいいじゃないか。私の件を提案してみてくださいませ。私たちの軽・食料工業省の大臣が行きたいと言っていると依頼してくれ。けれども私は劇場とか、あれやこれや見ない。私は工場を見学する」と言った。こうやって希望を出して、駆けずり回っているうちに、彼らのところが旅費を出してくれた。それで、外務省の文化局の職員1人を連れてイギリスに行った。イギリスには、120年前に建造された、いまでは130年になってしまっているだろうドーソンというカシミヤの大企業があるのだ。その企業の工場群のすべてを見て回った。こういう具合に、イタリアと日本とイギリスのカシミヤ工場を見学した。

ちょうどこのころに、モンゴル政府と日本政府のあいだで条約が締結されて、日本が戦後補償としてモンゴルに1700万米ドルをくれることになったのだ。その戦後補償にもらうドルで、工場を建てなければならぬと考えていた。どの省も、自分たちのものを買うための計画を練っていたのだ。その当時、入札を公表なんかしないし、知りもしなかった。私たちはそんな言葉さえ耳にしたことはなかった。それで、今の言葉で言えば、入札のようなことが起こっている。私は試験工場を作っていたし、自分自身いくつかの場所に見学にも行っているものだから、日本からもらう資本を利用するために、考えを練って、例の試験工場ですべてのものを2つのスーツケース一杯に入れて、2人の若者を、1人は副大臣、もう1人は今のコンビナートの工場長となったヨンドンジャムツたちを引き連れて、長官の1人1人のところに行って宣伝した。ヨンドンジャムツは、当時、省で働いていたんだ。政治局の議員のところ、2つのスーツケースに入ったものをもって、若者2人と一緒に入って、頼みにいった。日本が払うことになった戦後補償の1700万米ドルで工場を建てようという考えを言った。K：そのお金でまさにそういう工場を建てようとは決まっていなかったのですか？

D：決まっていなかった。その金を何に利用するかを決めるために、10いくつかの計画案が出ていた。建設省はセメント工場、ガラス工場を建てようといった計画案、私たちの省では、カシミヤ工場を建てるといった計画案、木材産業省は、木材加工コンビナートを建設するという計画案、公共事業省はどんな計画案を作ったか私は覚えて

いないがね。農牧業省はとても変わった計画案を作っていた。全牧民の1戸につき、2,3種類の絹、郡と協同組合の長たちに、UAZ-469の車のタイヤを支給する計画を作っていた。その当時、UAZ-469の車のタイヤが非常に稀少だったからね。ソ連のタイヤ製造工場の経営が悪くなったのだと思う。それで、2,3年の予備タイヤをもっておく計画案が作られたのだ。そんな変な計画案まで作って、それでほとんどそのUAZ-469の車のタイヤを購入する計画が決まりかけそうになっていた。世帯ごとに2,3枚の絹を支給するっていうのは、本当に大きなことだよ。当時、20万以上の世帯が牧畜をしていたように思う。この10幾つの計画案のなかで、必要のないものなんて1つもない。すべて必要だ。私はすべての長官のところに宣伝に行っていた。中には「もっともだ」と言って応援してくれる。けれども中には「いずれにせよ、モンゴルではもうカシミア原毛を輸出して外貨を稼いでいるよ。カシミア製品を本当に買うのか、買わないのか。カシミア原毛なら買うのは保証つきだ!」と言って乗り気ではない。

それで、私は最後にYu.ツェデンバル書記長のところに行って宣伝した。製品を見せた。書記長はとても賛同している。それで書記長は、「私たちは政治局で話し合っただけで決定する。君は準備をしておきなさい」と言う。それから1日たって、私を政治局の会議に呼びつけた。中に入ってまもなく、書記長は「さあ、この課題で10近くの計画案が出ている。これを早急に決めて、日本側に返事しなくてはならない。これはP.ダムディンが私に宣伝したものだ。ラクダの毛とヤギのカシミア工場を建てる計画案が作ってある。この計画は将来性がある。モンゴルにヤギとラクダがいるかぎり、毛とカシミアは毎年できるだろう?そういうことだ。さあ、この工場の件を即決しよう!もっともだろう?」と言った。書記長がそう言っているのだから、他の者たちは沈黙していた。それで、決定だった。私も「私たちの計画は落ちるかな、どうなるかな、私たちに賛同してくれるかなあ」と不安だった。それで、決定してくれたものだから、本当に喜んだよ。それで、この工場が建てられたのだよ。

この工場は3年内で建てた。モンゴルでは、これほどの規模の工場を3年以内で建てたなんてことはない。だいたい5,6年しかかかって建てたのだ。このように、私はこの問題を大臣時代に解決した。それから私は、79年に党中央委員会の書記長になった。その部署で建設労働者をうまく組織した。彼らには高い要求を出した。彼らには良い労働機会を与えた。そのおかげで、短期間で建てることができた。そういう経緯だ。今は、日本国とは関係が拡大し、国民や専門家のあいだで良いつながりができた。当時、70年代には日本国と貿易をすることはおろか、日本人と何気なく会って話しをするのもままならなかった時代だよ。私は一昨年、今から3年前に日本大使館に1度行った。それで、「今はいい時代になった。日本人とモンゴル人が輪になって座って、ビールを飲んだり、酒を飲んだりする素晴らしい時代になった。当時、70年代には、日本人と商売の話をするのはもちろん、会うのも難しかったのだよ」と昔話をした。だ

から、私は、日本・モンゴルの友好を広げるうえで、とくに経済や貿易関係を拡大するのに、自分は貢献した、いつも思う。このように、「ゴビ」コンビナートを建てたというわけだ。

そのコンビナートは建設当初、年間1200トンのカシミヤと200トンのラクダの毛を加工していた。今は、かなり増加しているがね。今年は、このコンビナートが20周年になろうとしている。今日も、私と会って対談してドキュメンタリーを撮ると言っている。君と会った後、出かける。もう1つ昔話を語ろう。「ゴビ」コンビナートの技術者たちを日本で養成したのだよ。私たちのところでは、資本主義国のなかではドイツに30年代に留学していた。それで、最終的には、彼らを反革命的だと言って、逮捕して、刑務所に入れていたということがある。その後、70年から80年代まで、資本主義国では専門家を養成していなかった。まったく行かせなかった。この問題を解決するのに、私は何年も大臣をやったし、物事をうまく動かすようになった経験というか、そういう方法を1つ使ったのだ。この問題を最初に日本大使館と話した。大使は秋山という良い人だった。

K：ちょうどそのころ、私はウランバートルにいました。

D：ああ、そうかね？それで、秋山氏を招いて「現在、こうやって工場を建てはじめようとしています！工場というのは、技術者なしに、とくに、その工場を建てた後、専門知識を身につけた技術者なしでやっていくのは難しい！この工場の技術者を、あなたの国で養成したいのです！これに協力してください！私たちのところには金がありません！モンゴルでの工場建設計画のなかに、技術者養成の費用は含まれていないのです。何かの方法で技術者を養成する費用をもらって助けてください！」と言った。秋山氏と私はかなり親しくなったのだ。秋山氏は私の話を聞いて「養成するのは何人ですか？」と言う。私は前もって見積もりを済ませていた。私の計算では24人必要だった。「そんなに大勢の人を日本が費用を出して養成するのは無理です！」と言う。「実現しなくてもかまいません。いずれにせよ、この問題をそちらの方がたと話し合ってください！」と私は言った。彼は東京によく出張する人だった。それで出張した折にこの問題を話したのだらうな。戻って来て私と会った。「大臣。この件は、まったく実現しそうもありません。24人を大学で5年間学ばせるのに、どれほどの費用がかかっているのですか？人数を減らしてください！」と言う。私は考えた。そして人数を減らして12人にした。大使はもう1度日本側に話した。それで戻って来て、再度「人数を減らしてください」と言った。彼は私に本当のことを話している。「あなたがたが人を養成したい！と思っているのを私は理解しています。しかし、それほど大勢のモンゴル人を留学させる費用の件は、最終的に日本の大蔵省に話がいきます。日本の大蔵省は、こんな莫大な費用を出しません」と言った。

こんなふう話し合いを続けて、人数は2名になった。すると彼は「2人なら、私

がなんとかしましょう」と言う。この2名の滞在費と往復運賃の全額を日本側が出すことになった。今、日本のモンゴル大使館の付属通商代表をしているガンホヤグ（原文まま）、それからモンゴル外務省で働いているジグジドの2人が、最初の留学生だ。この2人を留学させた経緯もとてもおもしろいものだった。この2人を、モンゴル国立大学の2年生のクラス、経済単科大学の2年生から選んだんだ。ほかのところからは取らない、と決めた。それで、日本大使館と合同で試験をした。すると、日本で教育を受けさせようとしているという話が噂されるようになった。私の友達の大臣たちは、私のところに電話をかけてきて「自分の子ども、自分の弟や妹を行かせてくれ」と頼む。それで私は「ウランバートルからは1人も取らない」と言っていた。自分の省や幹部の長に「ウランバートルからは人を取らない、地方の牧民で父母のいる子どもを取ってくれ」と命じた。このとき日本に行った2人の子どもは、1人はアルハンガイ県の子ども、もう1人はドンドゴビ県の子どもだったのだ。そうでなければ、ウランバートルの1つの建物から1人の子ども、医者から1人の子ども、大臣から1人の子どもが行って、卒業して戻ってきて、技術者になってはくれなかったと思う。そういう子どもは、父母に従って結局はどこかに行ってしまうのだよ。

まず試験には32人が受けに来た。そこから4人を残して、日本大使館に連れて行って試験をしたのだ。日本の大学の先生が来たのだという。日本語、いやそれとは違うものだったかな、試験をした。その試験にガンホヤグと、ジグジドの2人が合格して留学することになった。すると、1つ大きな問題が生じた。そのころ、資本主義国に学生を留学させる問題は、党中央委員会で決定することになっていた。党中央委員会の許可がまず出て、そのあとで行かせる人を選ぶ手続きに入らなくてはならなかった。私は、行かせる人間の数でさえ許可を取っていなかったし、どんな許可も取っていなかった。それで、中央委員会にその選んだ2人の問題を言い出すときに、すべての問題が浮上してくるだろう？「日本で教育を受けさせることを、どこの誰が許可したのだね？許可した決定はあるのか？」と言ってやはり問題になった。中央委員会から許可した決定をくたさせなければ、パスポートを出してくれないのだよ。日本の学期の始まりは4月1日から始まるのだろうか？その2人は、語学の準備をして3、4ヶ月たった。3月中に、日本に行かなくてはならなかった。中央委員会でこの2人の子どもの問題を手続きしなくてはならなかった私たちの副大臣は、「大臣、この問題はどうも実現しないようだ。中央委員会の許可が出ていないうちに、資本主義国に留学させる問題を話したとして、問題が浮上している。自分で、Yu.ツェデンバル書記長のところへ行かなければ、これは実現しそうにない！」と言う。私もこういう問題になるとわかってきたよ。それで、Yu.ツェデンバル書記長のところに行った。

Yu.ツェデンバル書記長はとても人柄の良い人だよ。「書記長！私はあることをお尋ねしようと来ました。現在、私たちはカシミヤの工場を建て始めています。あなたの

賛同で、この問題を政治局が決定してくれました。この工場は3年後に稼働します。技術者を養成するには最低5年かかります。私たちはそのときに、工場が稼働し始めるときに、まともに働くことのできる技術者がいない状態です。今、急いで人を派遣して学ばせなければ、また数年かかります。私たちは今2年出遅れている段階のうちに行かせたいと思います。私たちは日本大使館と協同して、30数人から2人を選んでいきます。こうやって、この2人の子どもの問題を中央委員会に申し入れたところ、決定に二の足を踏んでいます！」と言った。これを聞いて、Yu.ツェデンバル書記長は「党中央委員会の許可が出ないうちに、君はどうして資本主義国に人を学ばせる問題を勝手に話したのだね？こういう規定になっているのを君は知っているだろう？」と言う。「そういう規定になっているのは知っています！」と言った。「それなら、どうして問題を規定通りに決めなかったのだね？」と言う。「書記長！もしこの問題をその規定通りに申し入れていたら、私にいつまでも、誰も決定してくれなかったと思いますよ。私は、日本側と話して、彼らの留学費用を彼らに出してもらおうようにしました。モンゴルからは費用を一切出しません。行かせる人間をすっかり選んで決めてしまいました。もう、行かせるほか仕方がありません。あなたが許可を出してください。お願いですから！」と言った。「それから、私の処分をしてください！」と言った。私は書記長の部屋に入るときに、決議案の下書きを作って入ったのだ。その決議案の下書きの最初の条に、軽・食料工業省の大臣P.ダムディンは、資本主義国に人を留学させる問題を党中央委員会の許可なしに、勝手に話し、規定にのっとらない行為をとったゆえに、党より叱責処分にするように」と書いて、次の条に、選ばれた2人の子どもを日本に留学させることを許可するように」と書いておいた。そういう準備された案をもって入らなければ、邪魔されるのだよ。それで、その決議案を書記長に渡して、「この決議案にサインしてください」と言った。書記長はそれを読んで、「君を処分するのはよそう！だが、今後気をつけたまえ」と言って、その第1条は消して、第2条を残してサインをした。こうして初めて、日本に留学させる問題が解決した。

近年、私たちの「物知り」たちは、「私たちが登場してから、資本主義国で留学できるようになった！」と言うようになった。私は1978年に、こうやって日本留学させていたのだ。今、日本でたくさんの人が勉強するようになっただろう。物事の最初というのは、難しいものだよ。それで、行こうとしている2人の若者を私は省で応対して、「さあ、君たち2人は、名誉を考えてよく勉強なさい！もし君たち2人がよく勉強して、きちんとしていれば、これから先の子どもたちも留学していくことになるのだからね」と注文した。その2人は、とてもよく勉強してきたのだ。

日本との付き合いの、もう1つおもしろい例を言おう。私は工場の建設現場に1週間に1度通っていた。それで、そこで働いている人たちとすっかり親しくなった。彼らには事務所がない。その付近にあった建物をつぶして、移動宿舎のようなものを作

って、そこにその工場の建設管理長が座っていた。現在、コンビナート長になったヨンドンジャムツはその当時管理長だったのだ。一般に日本人は働き者だ。仕事の進め方がとても素晴らしかった。何をしているかをすべて図にしている。私のことも、よく知るようになった。それで、その図で仕事の説明をする。あるとき、彼らのところへ行ったら、1つ大きなスローガンみたいなものが貼ってある。モンゴル・日本の職員たちの遵守すべき5条だという。

道具に愛着をもって臨み、失ったり、傷をつけたりしないようにすること。

作業服を着ること。

仕事に遅れないこと。

担当した仕事を質的に上げること。

など、ちょうどモンゴル人労働者の5つの欠点を書いてあった。仕事に遅れる、仕事の最中に寝る、道具を大切にしないで壊す、のはモンゴルの労働者たちに見られる普通の現象だ。私は彼らの長に「本当にもっともなことが書いてある。ここに書いた事柄は、本当にモンゴルの労働者の欠点だ」と言った。すると相手は不安そうな様子で「大臣！これをもう1度読んでみてください！第1に、このことはモンゴル語と日本語で書かれてあります。第2に、ここには、モンゴルと日本の労働者に向けて書いてあるでしょう？単にモンゴルの労働者たちに向けて書いているわけではありません！」と言っている。本当に、そのスローガンのもう一方には日本語で書いて貼ってあった。「それは判っている。だが、仕事に遅れる日本人なんていない。道具を無造作に放り投げる日本人はいない。汚い服を着て仕事にくるような日本人はいない。仕事中に寝ている日本人はいない。だから、これは私たちの欠陥なのだよ」と言った。それで大笑いになる。そのように、私たちは一緒に仕事をすることができたのだ。

もう1つ昔話を話そう。コンビナートを建てているとき、多いときには70人ほどの日本人が来ていた。彼らがモンゴルにいるあいだのサービスの問題が出てきた。私たちのところには外国人専門家サービス局という名前の特別の建物があった。その場所では、ドイツやチェコやロシアなどの国から来ている専門家たちに住居と食料品、寝具などを支給していた。それで、私は自分の副大臣に、「日本から専門家が来る機会を利用して、わが省の労働者たちにきちんとした住居を持たせることにしよう。君は日本から来ている専門家たちに住居と食料を提供して、サービスを充実させて、決議案を作って、公共事業省、大蔵省、計画委員会などの重要な書記官から許可をもらって来い！」と命じた。日本からモンゴルに初めて専門家たちが来ている。彼らに住居や食事を提供する問題は、たいへんな問題の1つだった。だから、そうした重要機関から許可を取って、政府決定を出させるのがよかったのだ。この決定が出しまえば、このすべての問題は許可を出した機関が自分で責任をもたなくてはならない。日本にはこういうシステムがあるか、ないかは知らないが。許可を取ろうとして行くと、ど

の省も許可を出そうとしない。

公共事業省大臣のO.ニャマーという人がいたのだがね。その人が「いずれにしても、この問題を閣議に申し入れなさい！」と言う。そうしておくで、会議で話し合う規定になっているのだ。まもなく私や関係省庁の大臣が呼ばれた。その会議の席上で私は、「今、日本から工場建設で働く専門家たちが来ようとしている。彼らの住居とサービス問題をどうやって解決するか」という問題を提起した。そのときの内閣首班はJ.バトムンフ氏だった。「君の申し出てきた問題を許可する機関は1つもないぞ！」と彼は言う。それで私はもう1度立ち上がった。「なぜ許可しないのですか？私たちのところには、外国の専門家にサービスを提供できる省と、幾人もの長や大臣たちがいますよ。これらの人たちが、やってくる専門家たちの問題に責任をもたなければ、誰が責任をもつのですか？それに、日本の専門家たちはもう来つつあります。この人たちは毎日、風呂に入るし、食事とか細々としたものが要ります。サービスが必要です。ベッドのシーツだって、毎日換えなければなりません」と言った。すると「君はできる範囲で、自分で責任をもつべきだろう！」と言う。「それなら、私に建物を1つくださる必要があります！建物がなく、80人もの人をどこに住ませるのですか？」と言った。「そうしなさい！君はやって来る人びとの問題を自分だけでなんとかしなさい！」とまた言っている。「それでは、私は決定を出してもらいます。私は、ただ責任だけいただいてこのまま出ていくつもりはありません。きっちりと決定していただかなければ、この問題は最終的に責任者がいなくなります」と言って出て行った。

本当は、70人~80人というのは常駐する人間の数ではないのだよ。1回に、場合によっては、5人来るのがあっていい。場合によっては、例えば、ビデオ撮影をするときに、10人来て仕事をして帰る。私は来る人間の総数を最大限に言ったのだ。そのとき、私たちの省のちょうど隣に、48世帯の入る住宅が建てられていた。私はそれを見ながら通勤していた。それは市の行政管轄にあった住宅だ。それで、その会議から出て、省に戻ってきて、2条の決議案を作った。第1条に、市の48世帯住宅を軽・食料産業省に譲渡する。そして第2条に、「ゴビ」コンビナートの建設業を遂行している日本の専門家たちに提供するサービス問題を軽・食料工業省に委任する、と書いて、政府に提出した。そうしてその住宅は私たちの管轄下に移ってきた。

それは4つの出入り口のあるアパートだった。それを軽・食料産業省で費用を出して、きれいに修理した。私たちの省は資金が潤沢だった。各部屋に新しい家具、冷蔵庫などを十分に置いた。2つの出入り口の家には、私たちの省の労働者を入居させた。2つの出入り口の家には日本人がいた。彼らはコンビナートの建設を終えて帰国した。彼らが帰ったあと、そこに私たちの省の労働者たちが入った。省から遠くない、およそ2、3百メートル離れたところに、良い住宅ができた。省の労働者たちの住宅は遠いので、夜、残業しなければならぬときに、とてもたいへんだったのだ。こんな具合

に、私たちは日本から来ていた専門家たちの力で、単に工場を建てただけでなく、省の労働者たちの生活にも少々だが力になることができたのだ。

D：さあ、こういうことだが、まだ質問はあるかい？

K：明日、私たちと一緒に行って、あなたの大臣時代に、どことどの工場を建てたかを教えていただけます？

D：外を歩くのはとてもつらい。I.Lハグワスレン、君が行って教えてやればいだろう？

L：いいですよ。けれど、どの工場を見せるのですか？

D：じゃあ、次の工場を見学してくれ。皮革工場、靴工場、なめし革製品、クロムなめしヒツジ革工場、クロムなめしヤギ革工場、皮革科学センター、皮革修繕工場、織維工場、紡績工場、洗毛工場、非紡績布工場、絨毯工場、軽工業を代表するこうしたものを見せればすむ。

ただし、食料品工場を代表して次の工場を見学してくれ。「ウグージ」企業、パン・砂糖工場、肉コンビナート、小麦工場、飴・菓子工場。重工業から、第1発電所、それと第2、第3、第4発電所を見ればいい。

私の大臣だったところに働いていた人たちは、もうその大部分がいないのだ。新しい若者たちばかりになっている。彼らはこういう新しい問題を知らないよ。今の若者たちはどこにどんな工場があるかをまったく知らない。けれど、どんなバーがどこにあるかはよく知っているのだろうがね。私はそのうち産業通商省の新しい大臣たちと工場を回るようになったのだがね。私は彼にどんな工場が、何年にどのように建設されたか、それが今どんな状態になっているかを見せようと思うのだ。今は本当にひどくなった。

昔、私たちの時代にどんなに素晴らしく動いていた工場があったか。今つくづく残念だよ。主のいない物は、色艶がなくなって土気色になってしまうものだろう？今の工場群はちょうどそんなふうになった。つぶれてバラバラになったというのも話にならないほどだ。昔の私たちの時代に、モンゴルにやってきた賓客たちに、いくつかの工場を見せていた。どんな賓客でも、王侯貴族や、政府関係者や、国家元首たち、そのすべての人たちにそれらのいくつかの工場を見せていた。今や労働者たちは路頭に迷って、その工場はつぶれて、つぶれていない一角は貸し店舗になっている。借り手もだいたい中国人だよ。

さあ、これで君の聞いたことに答えたことになるかね？

K：はい。たいへん興味深い歴史をお話してくださって、ありがとうございました。

